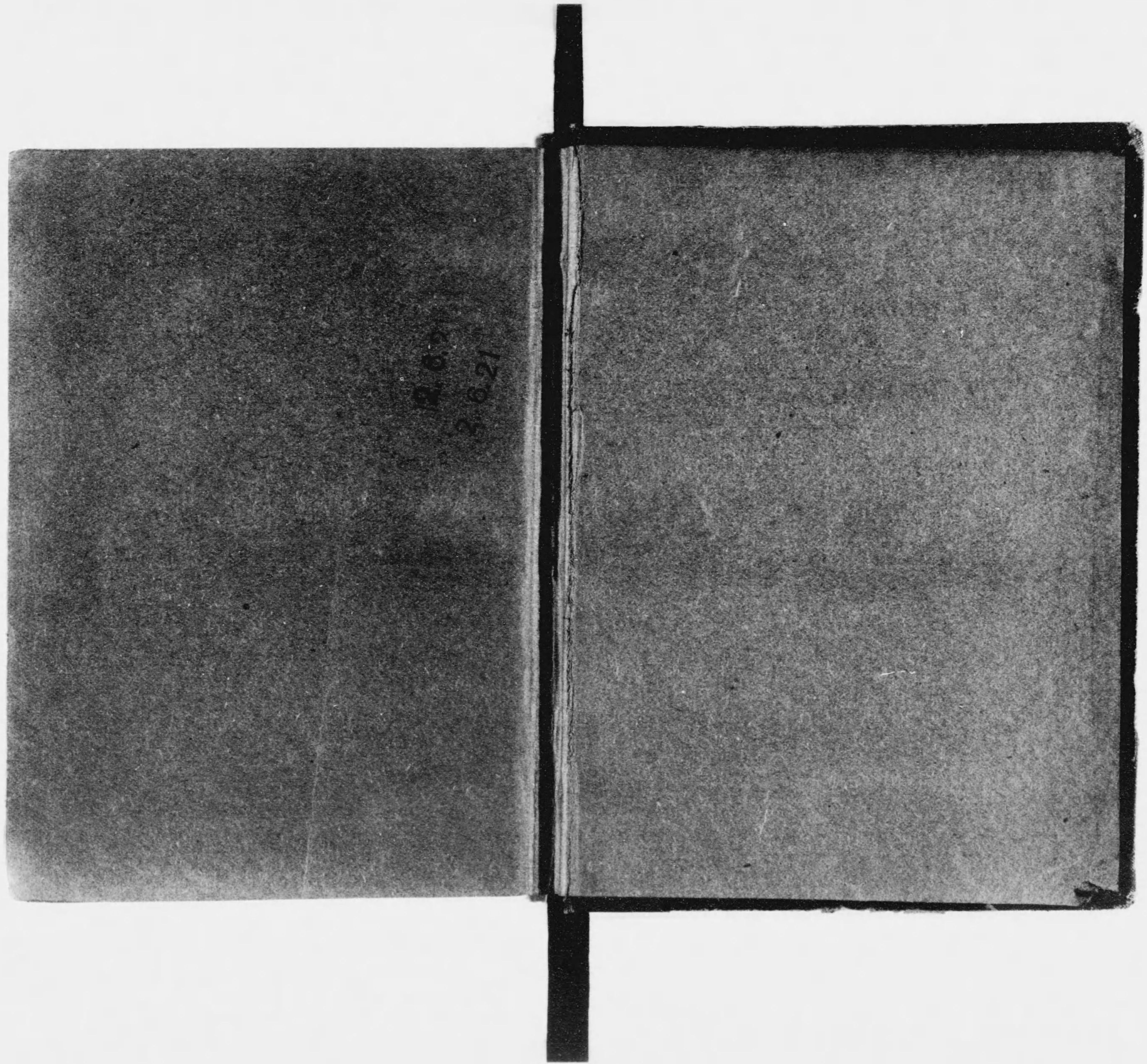


340
46

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始





2021
3021

340-46



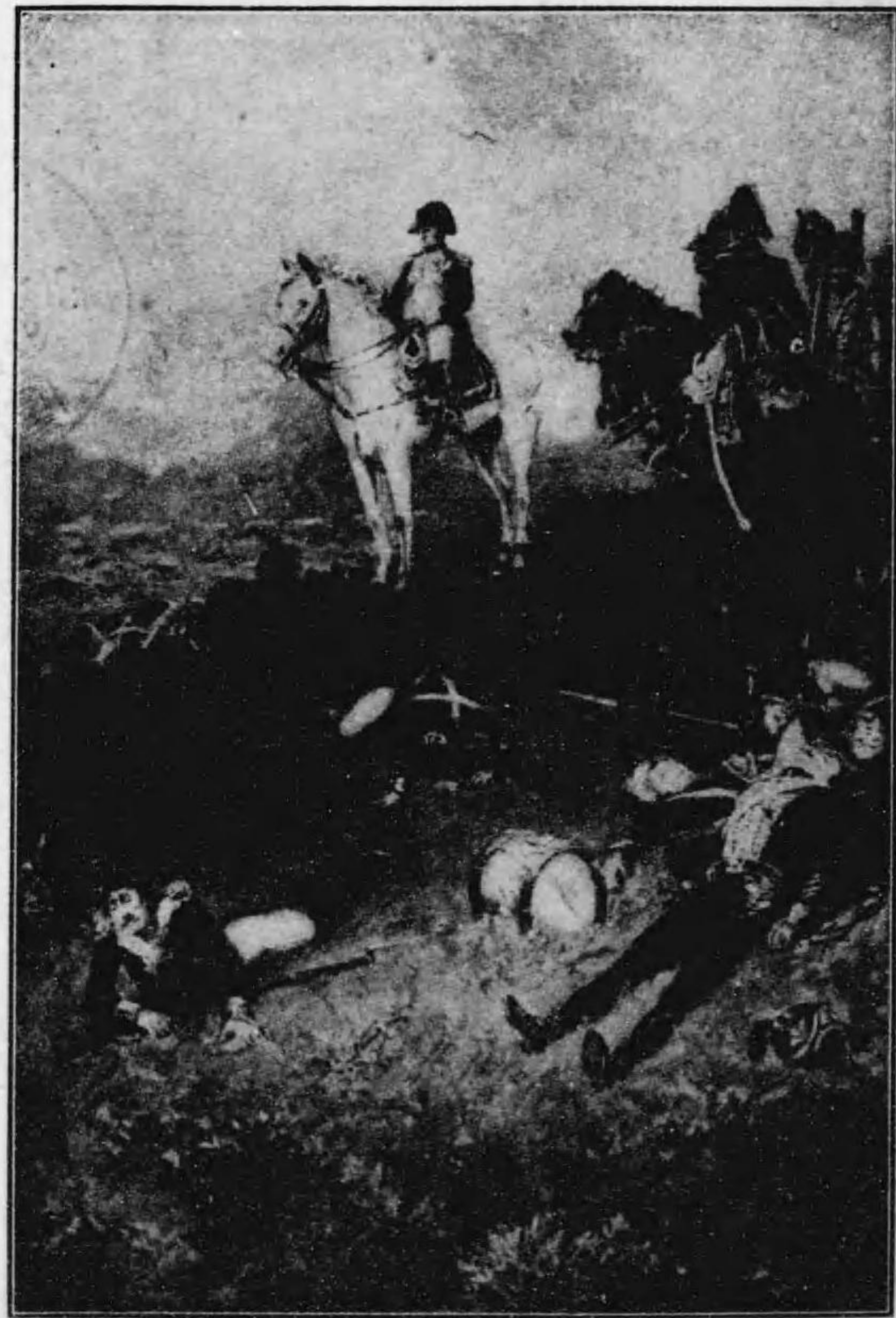
■西洋大著物語叢書第二編■

トルストイ原作

戦争と平和

嶋村抱月譯編

大正
3. 8. 10
内交



ソオレボナの場戦



ヤリマとルートナア

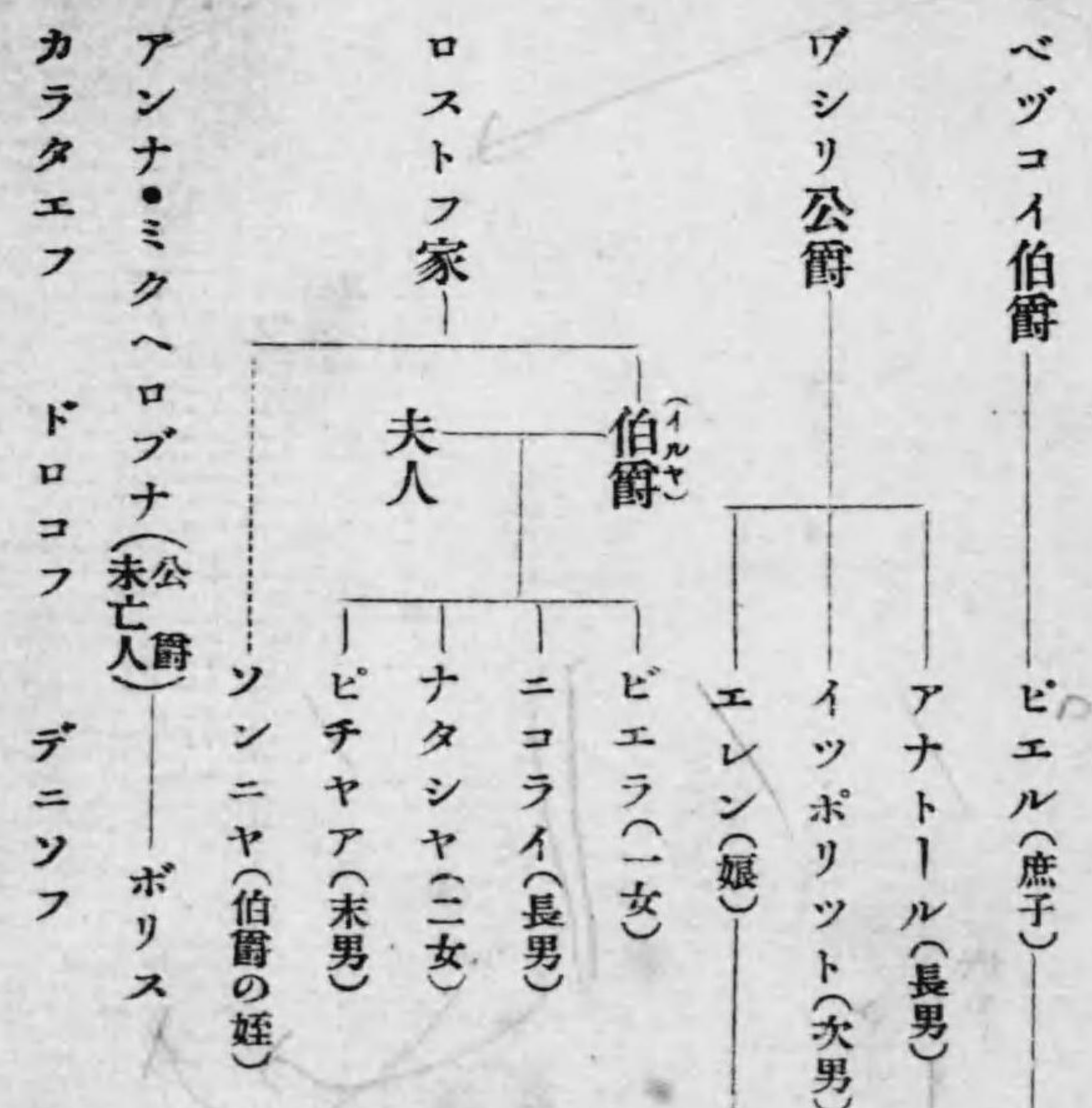
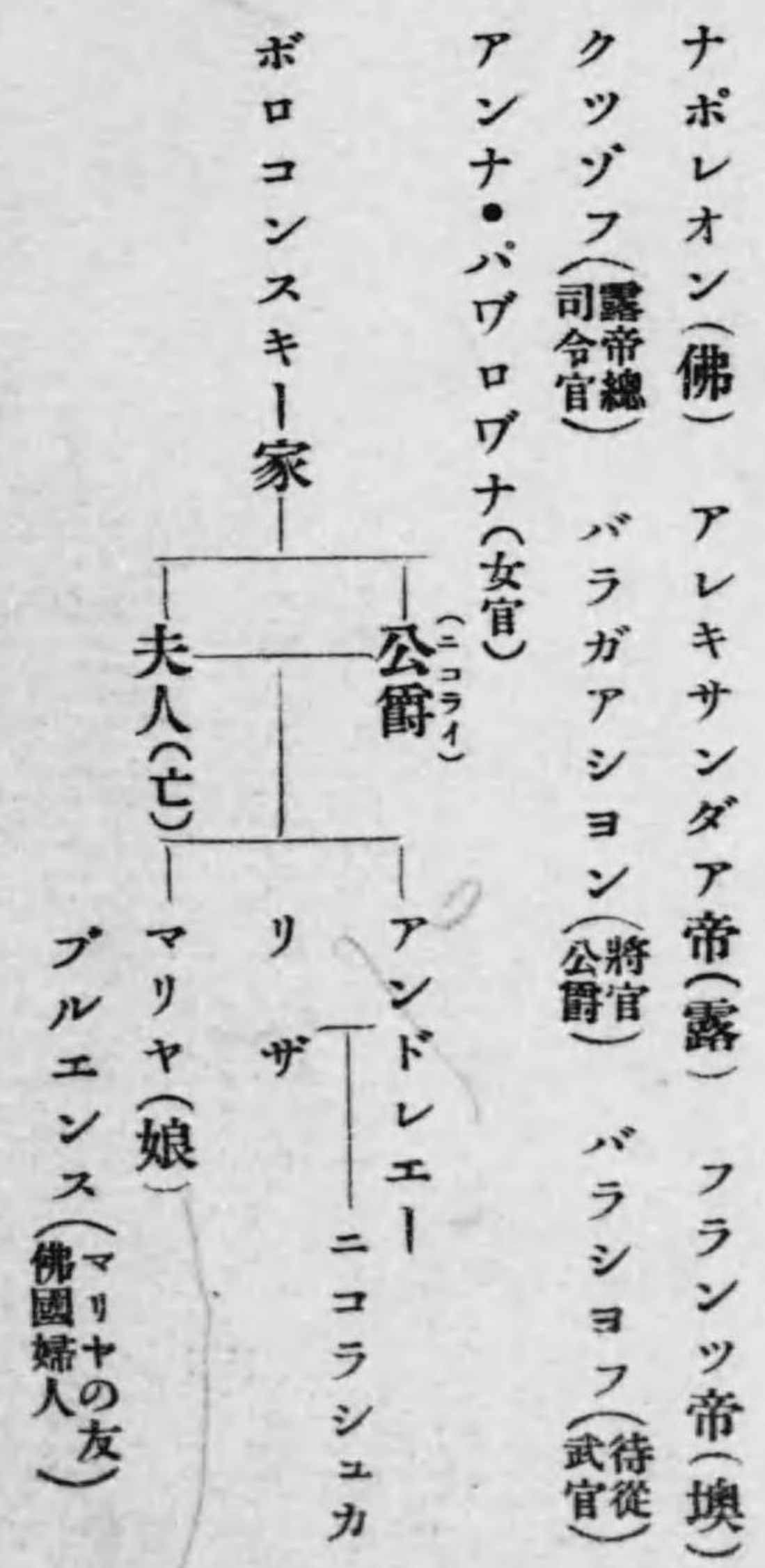
『戦争と平和』解題

『戦争と平和』はトルストイが三十六歳(一八六四年)から四十一歳(一八六九年)まで、即ち其の内體精神の最も旺盛な時代の産物で、此の作に於いて彼れが創作上の精力及び技倆は頂點に達したと稱せられる。材をナポレオン侵入時代の露西亞の社會にとつて、彼れが所謂變化——五十歳の時を轉機として文學者から宗教家に轉じた——の前の大苦悶を具象せるもの。篇中のビエル及びアンドレーに於いて、彼れ自身が投影されてゐると云ふのが一般の解釋だ。原作はこれを邦文に譯すれば正に四千枚を越ゆべく、量に於いて我が「源語」や「八犬傳」など、伯仲の間にあり、世界の文壇に一二を争ふ雄篇である。

讀者の爲めに

『時』一八〇五年七月……………一八一三年二月迄
 『處』主として、モスコウ、彼得堡

『重なる人々』



西洋大著物語叢書發行の趣旨
近時泰西の作品は頻々として我が文壇に移植せられるが、其餘りに大部なる爲め、傑作大著の名高くして、尙ほ翻譯に躊躇せらるゝもの尠くはない。小社こゝに見る所あり、文壇の諸名家を煩はして本叢書を刊行することゝなつた。即ち幾百頁幾千頁の大作を此の掌大の冊子に短縮し、其精髓とも云ふべき部分を簡潔なる物語風の筆によつて連続し、梗概を語ると共に原作の感味を髣髴せしめようとするのである。又、名教に害ありとして官憲に諱まれ、市場に上ほすとの出来ぬ名篇も、取捨按排其よろしきに從うて、本叢書中に加へることゝした。要は、セ、ツシヨンの簡捷を尙ふ時勢の要求に應じて、世の文學研究者に便せんとするの微意である。(發行者謹)

戦争と平和 (トルストイ原著)

島村抱月編

一千八百〇五年七月の或夜、女官アンナ・パヴロワナの家茶話會が開かれた。第一着に政治家のワシリ公爵が来た。アンナは此數日來咳が出て気分がよくなかつたが、機嫌よく客をもてなした。盛んに政治を論じたり、ナポレオンの噂をしたりする處は、四十を過ぎた女とも見えぬ元氣である。

應て話頭を轉じた公爵は沁々と云つた。「貴女^{あなた}だから申しますが、いやもう子供には全く弱らされますよ。アナートルは年に四百留^{ルン}も費^かり

ます。此の調子で五年も續いたらどうなる事かと心配でなりません。」
アンナは、暫く考へに沈んで居たが、「お嫁をお貰ひになつては如何
でせう。丁度私の親戚に父と二人限りの不幸な娘が御座いますが。あ
のポロコンスキー公爵の娘で——。」と云つた。公爵は、それは良縁だ、
是非に御世話を頼んだ。アンナは今晚、老公爵の息アンドレー夫
妻も見える筈だから早速話して見ようと答へた。

客室には次第に人が増して来る。ヴシリ公爵の娘エレンも来た。程
なくポロコンスキー公爵の若夫人も(アンドレ)も見えた。其の唇の短い、
締のない口が却つて愛嬌を添へてゐる。靜かに卓の間を通つて長椅子
に腰掛けた處へ、體格の立派な一人の青年が来た。頭は短く刈つて眼鏡
を掛けた流行の筒袴つばんを着けて居る。此青年はモスコウで今死にかゝつ
て居るベヅコイ伯爵の庶子ビエルである。多年外國に留學してゐて此

程歸つて来たばかりとて、かうした交際場裏に出るのは今夜が始めて
いある。アンナはよく来てくれたと喜んで厚く待遇した。少しも禮儀
を知らぬビエルは子供が玩具屋おもちゃやの前に立つたやうに目を見張り、耳を
澄まし、何一つ聞き落すまい、何一つ見残すまいとして、そは／＼と
してゐる。而して何か機會があつたら自分の意見かんがを述べて見ようと待
ち構へて居る。

招待せられた人は殆んど揃うた。三組に分かれて頻りに話に花が咲
く。エレンは飽く迄處女美を發揮して、一座のすべてをして「美人だ
なあ！」と感嘆させずには措かなかつた。一組では話上手のモンマア子
爵がナポレオンのドエンジン侯爵虐殺事件を論じて未だ人の知らぬ逸
話なども持出して聞手に非常の感動を與へてゐると、アンドレー公
爵もやつて来た。ヴシリは大使館の夜會に行く約束が有るからとて中

座したが、歸る時ピエルの手を取り、アンナに向つて「何卒此の熊を馴らして下さい、若い者には賢い御婦人と御交際を願ふより利益になる事はありません。」と云つた。

二

ヴシリが歸らうとすると、來合せてゐたドルベトスカヤ公爵老夫人は玄關迄隨いて來て、涙に濡れた顔には包み餘る憂の色を浮べて「あのボリスのことは如何なもので御座いませう、私ももう長くは彼得堡にも居れません。貴方から唯一言皇帝に御願ひ下さればボリスも近衛に入られませう。」と言つた。「及ぶ丈の事は致します、併し皇帝に御願ひ致すのは容易の事ではありませんので。」とヴシリは答へた。

ドルベトスカヤ公爵家は露西亞一流の名門だが今は貧乏して社會の信用も失うて居る。老夫人は息子のボリスが近衛に入れるやうにと頻

りに運動して居るので、今晚の宴會に出て來たのも目的は唯ヴシリに逢ふが爲めであつた。

娘のエレンが、夜會に遅れるとてヴシリをせき立てるのも構はず、老夫人は禮儀も恥も忘れて一向に頼んだ。

老夫人が席へ歸つて見ると、子爵は未だ盛んに論じて居る。アンドレーも調子を合せて盛にナポレオンを嘲つてゐる。と、突然ピエルは「併し、ドエンジン虐殺は政略上止むを得ないのぢやないですか。そこが却つてナポレオンの偉い所であると私は思ふのです。」と傍若無人に云ひ放つたので、皆呆然とした。アンナも當惑して袖を引いてさゝやいたがピエルは一向平氣で、傲然と眼鏡越しに一座を見廻しつゝ云ひ續ける。「ナポレオンだけである、革命の何たるやを知り之を征服したのは――。多數の利益の前に一人の生命位は何でもないのです。彼は

革命の弊を矯めて、其のよい所——例へば市民の平等權とか言論印刷の自由とかを保存したのです。此れが彼の勢力を得た理由わけなのです。」
子爵は忌々しげに叫んだ。「自由？平等？それは却つて彼によつて破壊されたのだ。」

アンナは子爵が機嫌を損じたのを見て子爵の味方をして此の若い雄辯家を攻撃した。アンドレーエーは興ありげに、ビエル、子爵、アンナと交々に見て、「どうもナポレオンのする事には了解の出来ない所がある。」と云ふやうな事を云つて、立上つて妻に歸る合圖をした。

無作法者のビエルは客間から去る時に主人に挨拶する事も忘れてぼんやりとしてゐた。自分の帽子と間違へて、或る將軍の鳥の毛のついた三角帽子を手につけて無暗に鳥の毛を引張つたりして居た。併しその無作法な言語動作の中に却て純な質朴な心持が見えてゐた。アンナは

ビエルが去る時「又御近い内に」と云つて「何事もよく考へてなさらなければいけませんよ。」と云ひ添へた。ビエルは黙つて唯一寸禮をした丈であつた。

ビエルが歸つたのでアンナはアンドレーエー夫人にヴシリから頼まれた結婚の話をする機會を得た。

三

ビエルは約束通りアンドレーエーを訪ねた。アンドレーエーの居間に通ると直に長椅子にもたれて、棚の本を取つて肘ひじをついて真中所から読み始めた。やがてアンドレーエーは白い小さい手を揉みながらやつて来た。ビエルを見ると直ぐに、

「先刻さっきの、あれは、何といふ事だね。アンナに對つて——？」

ビエルは身體からだを振つて見上げた。手を振つて笑ひながら、「あれは仲

仲面白い婦人ですよ。しかし私の云ふ事が十分に解らないのです。各國の勢力が平衡して來なければ永遠の平和は如何しても得られるものぢやありません。」

アンドレーエは斯んな抽象的な問題には更に興味がなかつた。

「併し自分の考を云ふにしても時と場合を考へなけりや困る。それはさうと將來の目的は決まりましたか。選抜衛兵にしましたか、外交官の方ですか?」

「まだ決りません。どちらも嫌ひなんです。」

「何とか早く決めたらどうです。御父さんも待つて御出でだらうに。」

「さう……。軍隊に入つて世界最大の偉人と闘ふのも亦面白いでせうかね。」

此の子供らしい話にはアンドレーエは答へなかつた。

そこへ夫人が來た。ピエルは夫人に「私は公爵が從軍なさる理由が分りません。」と云つた。夫人は「私にも分りません。男といふものはなせ戦争になんか行かなきやならないのでせう。女には平和な家庭の外に何も願ひはないのですけれど。」

ピエルは黙つてゐた。夫人は「あゝ戦争に行くなんて、聞くのも厭で御座います。屹度悲しい日が來ます。」と身を振はして泣き出したので公爵は驚いて、「リザ!何も其様に嘆く事は無いよ。」

「あゝ、男と云ふ者はなせみんなこんなに我儘勝手なんでせう。唯御自分の出來心から私を見捨て、田舎へ唯一人置いて——。」

「御父さんも妹も居るぢやないか。」と公爵は慰めた。

「貴郎と別れては一人居るのも同様に御座います。」と夫人の調子は次第に激した。

「醫者は早く寝る様に云つて居た。去つて御寝みなさい。」と公爵は云つた。夫人は霎時黙つて居たが「貴郎はほんとに前とは御變りになりましたね、如何しても私を置いて御出征なさるおつもりなんですか？六ヶ月前には……。」

「リザ、もう其様な話は止めよう」と公爵は鋭く云つた。ピエルも見兼ねて夫人を宥めたので、遂に夫人も機嫌を直して去つた。後でアンドレーエは、

「君も結婚するなら年を老つてからにしたまへ。さもないとつまらぬ事に精神を悩ますからなあ。」などと云つた。「又クラギン(公爵)の子供等と交際してはいけない。あの様な生活をしてゐては爲にならない。」なども云ひ添へた。

ピエルが辭して歸つたのは夜の二時であつた。が、途中で不圖、今

晩、飲み仲間がクラギンの所へ集まる事を思ひ出した。アンドレーエの忠告を思ひ出さぬではなかつたが、意志の弱い彼は心の中で矛盾する言譯をして遂にそこへ行つた。

アナトール(公爵の子)は選兵兵舎内の大きな家にすんでゐた。既に食事も遊戯も終つたが、客はまだ残つて居た。また一と騒ぎさんく騒ぎ抜いた上、アナトール、ピエル、ドロコンスキ一の三人づれで出かけた。

ドロコンスキイは歩兵士官で、口髯のない、口元の優しい男で非常に兵士仲間に人望がある。酒も善く飲むが取り亂す事は無かつた。

四

ヴシリ公爵の斡旋で、ドルベトスカヤ公爵老夫人の息子ボリスは旗手として近衛の或る聯隊に入る事になつた。老夫人はモスコウへ歸る

と直に親族のロストフ伯爵家へ行つた。近衛隊は八月二十三日彼得堡ペテルブルグを出發した、ボリスはそれをモスコウで待つて居た。

ロストフ家では、今日は母子の命名日ネムデーで朝から出入の馬車が引きもきらない。伯爵夫人は今年四十五才、嚴めしげな東洋型の容貌である。公爵老夫人も親族の資格で客間へ出て應接した。最後に、クラギン夫人も娘を伴れて見えた。伯爵夫人は終日の應接に疲れ切つて居たが快よく應対した。此頃モスコウの大事件とも云ふ可き老伯爵のベヅコイの病氣の容態や庶子ピエルの噂やで話は花が咲いた。クラギン夫人は、「伯爵も誠に御氣の毒です、御病氣は重いし、御子息の事は御心配になるし……。」と云つた。

伯爵夫人は老伯爵の病氣の原因については五十遍も聞かされて更に興味が無かつたが、「如何いたしましたの？」と合槌を打たねばならな

かつた。夫人は言葉ことばを繼いで「何でも彼得堡で亂暴なことをしたとかで市から退去を命せられたといふことで御座いますよ。」と語り出す。

伯爵夫人も來客も熱心に聞いて居た。クラギン夫人は調子に乗つて「アナトール、ドロコンスキーなどといふ人達と二人で、熊を車に乗せて女優の宅へ押しかけて行つて、警察から止めに行きますと、熊の脊中へ警部を縛つて川へ投げ込んだとかいふ事で——。すると熊が警部を負うて泳いだとかいふ事ですよ。」

之を聞いて來客は皆非常に笑つた。夫人は「子供を外國なんかへ遣るものぢやありませんね。」と云ひ足した。

俄かに次の室から入口の方へ走つて來る足音が聞えた。十三になるナタシヤが走つて來て室の真中に立ちとまる。すると直に赤いカラーをつけた學生、近衛の青年士官、十五位の少女、薔薇色の顔をして居

る少年が続いて入つて来た。學生は伯爵の長男ニコライ、士官はボリス、少女は伯爵の姪ソンニヤ、少年は末子ピチャである。ナタシヤが逃げて行くとボリスも後を追つて行く。ピチャも後から驅けて行つて、あとにニコライとソンニヤが残つた。ソンニヤは身體は小さいが、柔和な目、愛嬌のある身振が廳で美しい猫になる小猫を思はせる。人々の話を面白さうに聞いて居たが、目はその長い睫まつげの下から、近い内に入隊する従兄のニコライに注がれて居た。ロストフ伯爵はクラギン夫人に向つて、ニコライを指して「ボリスが近衛士官に任命されたので、これも學校をやめて軍隊に入ると申します。二人は離れられない仲善しですから。」

ニコライは少しはにかんで、「仲善だからといふ丈では無いんです。御父さんが行くなど仰有れば無論行きません。けれどとても外交官に

はなれないし、どうしても軍人がいゝんです。」

ソンニヤは早く此處を出て遊ぼうと云ふ様な目付をしてニコライを見たが、ニコライはジュリーと親しげに話をしてゐるのでソンニヤは嫉ましくなつた。が、態と唇に笑を浮べて室を出た。ニコライも後から追つて出たので、あとは丁度日の光が消えたやうに淋しくなつた。

ナタシヤは温室でボリスの來るのを待つて居た。足音を聞いて急いで花の間に隠れた。入つて來たボリスは制服の袖の塵を拂つて、一寸鏡に顔を映して見て如何にも満足した風で出て行つた。ナタシヤは尙ほ隠れて様子を見て居ると、此度はソンニヤが客室の方を見ながら獨言を云ひくゝ入つて來た。其處へニコライが來た。ソンニヤは怒つてゐて仲々機嫌が直らないので、ニコライは色々にして宥め、「僕がわるかつたから許してお呉れ。」と云つて接吻した。

「好い事してる！」とそつと見てゐたナタシヤは思つた。二人が去つた後、ボリスを温室に呼び入れて、以前そこに投げ捨て、置いた人形を取上げて「人形に接吻して下さい。」と云つた。返答がないので「其れなら私にして下さいませんか？」と低い聲で聞いた。ボリスは顔を赤らめて「馬鹿な事！」と叫んだ。ナタシヤは桶の上へとび上り両手でボリスの首の周りを抱いて、強く接吻した。ボリスは、「私はお前を愛して居るけど、四年の間は斯様な事はしつこなし。」と云つた。ナタシヤは、十三、十四、十五、十六と數へて見て、「私、待つてゝよ。」と云つて樂しげな顔をして去つた。

五

ロストフ伯爵夫人とドルベトスカヤ公爵老夫人アンナとは舊友なので二人は互に隔てなく語り合つて居た、伯爵夫人は長女ビエラが側に

居たので「妹等はどんな事をして居るか見て御出で。」といひつけた。ビエラは或る室で、ソンニヤはニコライと、ナタシヤはボリスと互に樂しさうに話をして居るのを見付けた。ビエラは何となく腹立たしく「此人達は一體何をして居るの？馬鹿な真似をして——。」と叱る様に云つた。皆も負けては居ないで、喧しく云ひ争つた。

伯爵夫人とアンナはなほいろ／＼と話し續けた。アンナは「私も寡婦になつてから、随分色々苦勞しましたよ。ほんとに苦勞といふ苦勞はしつくしましたよ。御存じの訴訟事件で有つた物もみな失くしてしまひますし。本當に今は一コベックも自由にならないんですよ。どうしてボリスの軍服を拵へようかと、それさへ心配でなりませんの。」と手巾を顔へ當て、泣き出して、「あの名親のベッコイ伯爵ばかりが頼りなのですけれど——。」

伯爵夫人も涙を流して静かに聞いて居る。アンナは語をついで「伯爵はあれ丈の大財産を有つて居ても、あの通りの大病で苦しんで居りますし——ボリスは未だこれからの人間ですから——」。

「伯爵は何かボリスさんにお遺しなさる御積りなんでせう。」

「いゝえ、當^{あて}にはなりません。金持と貴族は案外無慈悲なものですからねえ。併し私は、ボリスを連れて逢ひに行かうと思ひます。子供の運命の定まる事ですから、又私の身に取つても同様の大事件で御座いますから。」

斯う云つたアンナは急に決心して直に暇乞して、ベツコイ伯爵の邸を訪ねた。

馬車が伯爵邸の廣庭に入つた時、夫人がボリスの手を取つて「伯爵は御前の名親で御世話にならねばならない御方ですよ。出来る丈氣を

お付け。」と注意すると、ボリスは冷やかに、「畏りました。」と云ふ。

伯爵家の従僕は馬車は立派だが、その服装が餘りに粗末なので「どなたに御面會ですか？ 閣下は今日は御容態がお悪いので御面會は叶ひません。」と云つた。ボリスは腹立たしげに歸りませうと云ふ。母親は之を制して、親族の者だからと云つて強ひて頼んだ。

通された室にはヴシリが来て居た。ヴシリは不思議な處で逢つたものだといふやうな顔附で母子を半々に見た。アンナが病人の容態を尋ねると、「あまり望みがありますまい。」と簡單に答へる。アンナは、子供を指して、「之がボリスで御座います。先達からいろ／＼御厄介になりました。御親切は此子も決して忘れません。」と云つた。ボリスも、丁寧に禮を云つた。公爵はボリスに色々聞いたり、話をしたりした。

アンナが、「今迄色々御世話になつて居りますので今の中、伯父（ア

ナはベッコイ伯爵)に逢ひ度いと思ひまして……。」といふと公爵は、「御逢ひなさるのは却つて病人の爲めになりません。晩迄御待ちなすつた方が宜いでせう。醫者も餘程心配してゐるやうですが。」

しかし、アンナは「公爵、斯んな場合には待てません。」と云つて、戸を開けて出て行つた。恐ろしく腰の長い、冷い表情をして居る伯爵の姪に逢つて、「私は唯今着いた所で御座います。伯父の看病の御手傳に参りました。定めて貴嬢も御困りで御座いませう。」と云つたが、彼女は笑顔一つしないで、黙つて行つて了つた。アンナはボリスを呼んで私は伯父に遇つて来る、御前はビエルを探してロストフ家の招待を傳へよと云ひ付けた。ビエルは二三日前に彼得堡から歸つて父の家に住んで居るのである。此家の三人の娘は皆ビエルを幽霊か癩病患者の様に嫌つて居る。ビエルは父に逢ふ可く、其病室に行かうとすると、娘達

は今逢ひに行くのは殺しに行くやうなものだと云つて止めるので、仕方なく自分の居間に歸つてゐた。ボリスが尋ねて行つた時には彼は部屋の中を歩き廻つて壁を打つやうな身振手振で、獨演説をやつて居た。二人は直ぐ仲善になつて、従者が来て、母親がボリスを呼んで居ると告げるまで話に夢中になつてゐた。

六

アンナがベッコイ伯爵邸から歸つて来た時、ロストフ伯爵夫人は此不幸な舊友を憐んで、夫から五百留を得て、何にも云はずにアンナに與へたのでアンナは涙乍らにそれを貰つた。

ロストフ伯爵家の宴會には多くの來客があつた、主人夫婦は食堂の戸口に立つて應接して居た。ビエルもやつて来た。相變らず不作法で通路になる室の眞中の椅子に腰を据ゑ込んで、伯爵夫人が話し掛けて

も、ろくに返事もしないで、そは／＼と落ち着かぬ風で、きよと／＼と人を探して居る様子である。來客の多くは熊の一件を知つてゐるので、非常に興味をもつて、この丈の高い太つた青年を見た。此の穩和さうな男が、そんな亂暴な惡戯をしたとは如何しても受取れなかつた。

聽て人々は一群宛に分かれて、連りに話に花が咲いた。ビエルは多く語らないで、唯食ひ唯飲んで居る。

ボリスと相對したナタシヤは嬉しさうな顔をして、時々ビエルの様子を見る。ニコライは、時々笑ひ乍らジュリーに話しかけてゐる。離れて坐つたソンニヤは、唇に薄い笑を浮べてそれを見て居るが、心の中では嫉みに惱みつゝ、顔を赤くしたり青くしたりして、二人が何を話して居るかを知らうとしてゐる。一方の男子席では話が段々と活氣

を帯びて來た。某大佐(ニコライの上官に)は彼得堡に於て發布せられた宣戰詔勅の事を話して居る。伯爵の甥で交際社會で評判の毒舌家のシンシンは、「此度は愈々露國の番かなあ!」と云ふ。

「同盟國の安危は即ち我國の安危だ。露國は何處迄も戦はなければならぬ。我等の最後の一滴を流す迄も——。」と大佐はその獨逸訛の辯を鼓して、「君は如何思ふか?」とニコライに問うた。先程から熱心に聞いて居たニコライは動かし難い決心の色を浮べて「全く閣下の云はるゝ通りです、全く露國の安危に關します!」と云つたので、大佐は非常に満足した。伯爵は又戦争の話かと思つてゐる。

伯爵夫人は、子供等にカルタ臺を出してやつた。子供等は組を分けてカルタをやつたり、豎琴を弾いたり、歌を歌つたりして、楽しく遊んで居る。ナタシヤは、ソンニヤが見えなくなつたので、その居間へ

行つて見たがゐない。探し探して大廊下の大箱のある所（此所は伯爵家の若い女の隠れて泣く處と決つて居た）に行つて見ると、ソンニヤは、顔に手を當て、背を振はして泣いて居る。

「ソンニヤ、何うしたの？え、何うしたのよう！」とナタシヤは驚いて問うた。

ソンニヤは大きな口を開けて非常に醜い風をして「お、お、お——」と聲を擧げて泣いて居るので、ナタシヤも引き入れられて泣き乍らどろしたのだと聞くと、ソンニヤは頭を擡げて云はうとしたが、言へないので再び顔を隠す。暫くして、涙を拂つて、「ニコライさんが去つて了ふ、一週間の中に！。それで泣くんぢや無い……無いけれど……ナタシヤさんには……いゝえ誰にも、誰にも……判らない……彼んないゝ人を……ナタシヤさんはいゝわね。ニコライさんと私とは從兄弟で

すもの……それを御母さんは（伯爵夫人）は、私がニコライの出世の邪魔をするの、恩知らずだのつて叱るの。私、恩知らずぢやないわねえ。」と、言葉がはげしい歎きにもつれる。ナタシヤはソンニヤの心がよくのみこめたので、兄は決してジュリーの事なんか何とも思つちや居ないし、從兄弟だつて結婚の出来ぬ事はない、伯父のシンシンが從妹と結婚した例もあるし、と色々に宥めた。ソンニヤも何時か機嫌を直して、再び元氣になつて一緒に大廣間へ歸ると、丁度ニコライが皆の所望で此頃習ひ覺えた新しい歌の「泉」を歌ふ處であつた。それが終ると舞踏があつて、伯爵の上手な踊りが、皆を感心させた。

七

ロストフ伯爵家で舞踏の最中に、ベヅコイ伯爵は第六回の發作があつた。醫者は殆んど恢復の見込がないと云つた。邸の周圍も門も見舞

客の馬車に埋められ、應接室も人で一ぱいになり非常な混雑である。應接役のワシリ公爵は目が廻るほど忙しい。

公爵は伯爵の姪のカチシヤの室へ行つた。部屋はもう暗くなつて聖像の前に小さい二つの燈ランプがついて居た。カチシヤは驚いて、

「何か變つた事でもありませんか？」

「いや別に——唯一寸貴嬢にお話しとかなきやならない事があります。と答へて、不愉快らしい顔をして、「何時萬一の事になるかも知れませんからね。私は貴女あなたを自分の子の様に思つてゐるから申すのが貴女達御兄弟と私の妻の四人は伯爵の直接の相続者ですよ。……私ももう六十ですから、そろ／＼後の事も考へて置かなければならんです。——貴嬢は伯爵がビエルを呼びにやつた事を御存じですか？」

「私は唯安らかに靈魂の去らん事を神に祈るばかりで御座います。」

「それや勿論です。併し伯爵は遺言狀を書いてビエルに全財産をやらうとなすつてゐるのです。左様さうなると私達には何も遺らんですからね。」

「遺言狀を作つたのは知つて居りますが、ビエルは庶子ですもの。」とカチシヤが靜かに云ふと、公爵はせきこんで早口に、

「併し伯爵はビエルを嫡子にする様に皇帝に手紙を奉つたのです。そして多分それが許されるのです。」けれどもカチシヤはそれを信せぬ様子なので公爵は思ひ切つて、「貴女の御爲に云ふのですよ、カチシヤさん、若し遺言狀と手紙を破つて了はないと、貴女は世間の人から（よく出来た娘だなあ）と云はれる位が關の山で、是から先何一ついゝ事はありませんぞ。」

それから公爵に様々に説かれて、カチシヤの心も動いた。而して命せ

元
られた通りにすると決心した。公爵は時を失はぬ様にと注意した。

八

其中にビエルと公爵夫人アンナとが馬車でやつて来た。馬車が着いた時、アンナはビエルがいつの間にか寝轉かたむけて居るのを見て驚いて揺り起して、一緒に裏口から入り應接室の次の間に通つた。今迄低い聲で語り合つて居た人々は話を止めて目を二人に移した。アンナは僧侶に向つて「あゝ有難い事です、私達は親族のものですが、間に合はないやうな事は無いかと大へん心配して来たのですが……。」と云つて暫らくしてから「あゝ、今はもう神様に御籠とがりするばかりです。」と悲しげに嘆いて静かに戸を開けて出て行つた。聽てワシリ公爵は、三つの勳章を胸につけて莊重な足どりで出て来て、ビエルを見ると、つかつかと側へ寄つて手を取つて「ビエルさん確まかりなさい、伯爵は貴君あなたに御

逢あひになりたいたいと仰有るのです。」と云ふ。ビエルは「容態は如何ですか？」と吃り乍ら尋ねた。「半時間程前に又發作がありました。」と云つて公爵の病室へ引返す。續いて、アンナと僧侶と家僕とが入つて来たが、アンナは青白い顔をして、ビエルの腕を取り「儀式が始まりますから御出でなさい。」と云つた。ビエルは直ぐに行つた。その部屋はビエルのよく知つた部屋で、聖書の下の眞白な安樂椅子の上に、老伯爵の偉大な身體が横たへられてゐた。その周圍には立派な服装みなりをして髪を肩迄垂らした僧侶が手に蠟燭を秉つて嚴かにお勤をして居る。其後に三人の令嬢が居る。アンナは知らぬ婦人と一所に入口の側に居る。反對の入口の側に立つた公爵の後には醫者、副官、下男等が並んでゐる。丁度教會堂の様に男女は別々に反對の側に並んでゐるのである。深い沈黙の中に唯御勤めの聲丈が滅入るやうに聞える。伯爵は最早死んで了

つたものゝやうに身動きもせぬ。

突然伯爵は發作を起したので人々は口々に叫んで騒ぎ立つ。アンナは一段高い聲を振絞つて「此處ではいけません。すぐ寢床につれて行かなければ——」伯爵は寢臺の上に移された。ビエルがその枕元に寄ると、伯爵は唯しげ／＼とその顔を打成る。其目には無量の意味が籠つて居た。父と子は何も云はず唯互にじつと見交すのである。

これで父子の最後の會見も濟んだと云ふ事をアンナが身振でビエルに知らせたのは三分の後であつた。ほんの三分間、それがビエルには一時間以上に思はれた。

病人は俄かに恐怖の表情をする。引き歪めた口からは何ともわからぬ呻聲が漏れる。身體を壁の方へ向けて長い溜息をする。「程なく寢入るだらう。」とアンナはビエルと共に部屋を出て應接室に來て見るとそ

こにはカチシャと公爵ヴシリとがゐたカチシャは二人を見ると何か慌てゝ隠したやうであつた。公爵はアンナに別室に中餐の用意がしてあるから食べては如何だと云ふので、アンナはビエルと其室の方へ行つたが、どうも様子が變なので引返して爪先で歩いて應接室の方へ戻つて來ると、カチシャは今伯爵の室へ行かうとしてゐる處であつた。アンナは通路に立ち塞つて、「行つちやいけません、病人は今静かにさせて置かなければいけません。」と押しとゞめた。

すると安樂椅子に腰かけて居たヴシリは、「御やりなさい。カチシャさんは伯爵の御氣に入りですから。」と云ふ。カチシャは、持つて居る紙片を指示し乍らヴシリに、「此は机にあつた遺言狀です。伯爵は此を御忘れになつて居るのです。」と云つてアンナの側を通らうとする。「貴女御願ですから、それを……」と、アンナは急に其の紙片を引奪

つたので、カチシヤは驚いてとり返さうとする。「アンナさん、何をなさる？」とヴシリ公爵も傍から怒鳴つた。二人の女は暫く其紙片を奪ひあつてゐたが、カチシヤはとう／＼アンナから奪ひかへして「悪人！」と身を慄はす。此時戸がけた、ましく開いて伯爵の二番目の娘が走つて来て「何をして居るの？御阿父さまが——！何してるのよ、私一人置いといて……。」と叫んだ。カチシヤは吃驚した拍子にその紙片を落す。アンナは透かさず拾ひ取つて病室へと馳せつける。ヴシリ、カチシヤも續いて入つた。

病室から出た時、カチシヤは激しい憎悪の表情をビエルに投げつけた。ヴシリは、ビエルの側に行つて、その腕を取り、沈んだ調子で「ビエルさん、盗んだり欺いたり、いくら腕いた處で人間はつまり死ぬるのだ。死が總ての最後だよ。私も六十だ。あゝ、死ほど怖いもの

はないと云つて涙を流した。

最後に出て来たアンナは静かにビエルに歩み寄つてその額に接吻して「とう／＼亡くなられました。此方へ御出でなさい。泣き度い丈お泣きなさい。涙程死んだ人のなぐさめになるものは有りません。」と云つて暗い客間へ連れて行つた。が、暫くしてアンナが来た時はビエルは手枕をして呑氣らしい顔附で熟睡して居た。

翌朝、アンナはビエルに伯爵の遺言状を示して「未だ誰も開けては見ません。貴君は大きな財産を受けられるのです。新しい義務が出来たんですよ。」と云つた。ビエルは黙つて心苦しさに赤くなるばかりであつた。アンナは言葉をついで「御父さんは、お亡くなりになる一日前、私にボリスの面倒は見ると仰有いました。此上は貴君が御父さんに代つて、ボリスビエルを御世話下さるやうに、どうぞ宜しく御願ひ致しま

す。」と言添へてロストフ家に歸つた。

三

九
ポロコンスキー公爵家では、毎日子息のアンドレーエー夫妻の到着を待つて居る。前の元帥、公爵ニコライは今は娘マリア及び娘の友のブルエンヌと淋しい隠者の生活をして居る。渠は悪徳の根原は、怠惰と迷信であつて、美德の根原は、活動と聰明であるといふ信條を有つてゐるので、娘の教育も自分でやり、此の美德養成の手段として、代敷と幾何とを教へて居る。自分も常に日記をつけたり、高等數學を研究したり、庭園の手入れをしたり、始終何かと働いて居る。非常に嚴格なので親しみ難い。マリアは、數學を習つて居る時でも早く時間が濟んで獨で靜かに問題を解いて見たいと、心の中で考へるのである。今日は、アンドレーエー夫妻の來る日である。マリアはいつも苦に病め

る日課を終つて居間へ歸り、ジュリーからの手紙の封を切つて讀むと、大體斯ういふ意味であつた。モスコウは、戦争の噂計りである。皇帝親ら出陣との取沙汰さへある、二人の兄も出征した。親しい友のニコライも大學を途中で止して入隊する事に決定つた。それから伯爵ベツコイの相續問題も今モスコウで大評判になつて居る。相續者はビエルであらう。彼は一足飛に露國一流の大財産家になる譯で、馬鹿を見るのはヴシリ公爵である。公爵は今連りに子息の嫁を探して居るが其候補者は貴女あなたであると云ふ噂だ。

早速マリアは返事を書く。ベツゴイ伯の死については父は非常に落膽して此度は自分の番だなどと云つて悄しほれてゐます。私はそんな事のない様にと祈つて居ます。それから、ビエルは人の言ふ程悪人ではなく、寧ろ立派な心を有つてゐる人と思ひます。相續争ひに就いては兩方

三

其氣の毒に思ひます。聖書の、駝駱はよし針の目を通るとも、金持は神の王國に入れぬと云ふ句の眞理が、今こそ思ひ知られます。父は結婚に關しては何とも言ひませんが、ワシリ公爵から、近い内に來ると云ふ手紙があつたとは聞いてゐます。すべて神の御意のまゝですから、神の夫と選び給うた人には、妻として忠實に盡す丈の事で御座います、當地でも寄ると觸ると戦争の話計りで御座います。と云ふ意味の事を書いて、中には宗教上の意見を挾んだ。

十

アンドレエー夫妻は愈々到着した。夫人はマリアの手をとつて夫の出征を嘆いた。老公爵は丁度例の晝寢の最中であつたが間もなく目を覺して、アンドレエーを見るや「ボナボードを征伐に行くか、確りやれ！」と勵ます。アンドレエーはそれには答へないで、「只今參りました。」

と云つて父の健康を尋ねると、老公爵は「病氣には馬鹿者がるのだ。私は無論壯健ぢや。朝から晩迄働いて、其上攝生を重んずるからな。」と答へて、更に言葉を繼いで、現時の軍人殊にナポレオンを罵倒する。而して盛んに佛軍の状況や、普魯西、埃地利の情勢を尋ねる。アンドレエーは餘り氣が進まないが熱心に動かされて、種々と軍隊の模様など見聞きした事を話す。

やがて食堂が開かれる。王宮のその様に莊嚴な食堂には、一同席を列ねて公爵を待つて居る。時計が二時を打つと公爵がはいつて來て、席に着くとずつと一座を見渡す、嫁のお腹の様子をつく／＼と見て、「あゝ、もう直ぐだなあ、歩くに限る、出來る丈歩くのじゃ。」と云つて冷かに笑つた。アンドレエー夫人は不意にかう云はれたので、どぎまぎして一言も言はないでぼんやりしてゐた。併し公爵がいろ／＼と話しか

けたので段々元氣になつて來た。公爵は、こんどは話をアンドレーエに移して再び戦争の事やナポレオンの噂を初める。公爵は、一流の軍人や政治家をもまるで小學校の生徒位に思つて居る。アンドレーエは唯父の話を黙つて聞くばかりで、議論しようとも思はなかつたが、父がこんな片田舎に隠れてゐながら善く時勢に通じて、政治上や、軍事上の出來事を逐一正確に知つて居るのに驚いた。老公爵は「今夜はとも寝られぬ、徹夜話をしようぢやないか。」と更に話の火の手を擧げる。次の室にさがつたアンドレーエ夫人は、義妹のマリアに「御父さんは本當に御偉い事！」と云つて心から鼻を賞めるのであつた。マリアは、「だから私お父さんが怖いんですよ。」と答へた。

翌日の晩、アンドレーエは愈々出發する事になつたが、老公爵は、食事が済むと、平常のやうに自分の部屋に閉ぢ籠つてゐる。アンドレーエは自分で馬車を檢べたり行李を整へてたりした。「人は新生涯に出て行かうとする時最も眞面目な者である。」などと考へながら、活潑に部屋の中を歩き廻つて時々眼を睜つたり、頭を振つたりする。何となく心がふるへるのは戦に出る怖しさか、妻と別るゝ悲しさか。恐らく其兩方であらう。

そこへマリアが來て「此のつぎいつ御目にかゝられるかわかりませんわねえ、少し御話しませう。」アンドレーエは一寸笑つて「リザは何處に居るか?」「私の部屋で寝て被入いますよ。大へんお疲れのやうです。本當に優しい可愛らしい人、ほんとに子供のやうな方だわ。」

アンドレーエは黙つてゐる。

「兄さん、少しくらゐ悪い所があつても姉さんの事をあまりやかましく仰有いますな、ほんとに姉さんはお可哀さうですわ。姉さんの心

持にもなつて見ておあげなさいな。貴方に別れて一人でこんな田舎に
ゐなけりやならないんですもの。」

兄妹はそれからそれへと話を續ける。兄は妹を試して見るつもりで
「本當にマリア、御父さんの御氣象では御前も随分つらからう。此頃は
又格別氣むづかしくおなりなすつたやうだね。」

「あら、そんな事はありませんよ。兄さん、御父様を御批評なさるの
は悪いわ。兄さんは好い方だけれど何人^{たれ}をでも御批評なさる。」とマ
リアはたしなめるやうに云つた。

それからマリアは祖父が戰場につけて居た勳章を兄に渡して、必ず
身に着けて居るやうにと頼んだ。

やがて馬車の用意も出来た。暗い秋の夜である。人々は提灯を持つ
て、門口に佇んで居る。アンドレーエが父の室へ別を告げに行くと、老

公爵は机に向つて何か書いて居たが、一寸彼を見て、唯、「行くか」と
一言云つたきりで、そのまゝ熱心に何をか書き續けてゐる。やがて書
き終ると、「此をクツゾフ將軍に渡せ。お前の事を善く頼んである。」と
云ひ、さて机の傍にアンドレーエを連れて行つて、小さい箱の中から
手帖を取り出して、「お前よりは私の方が先に死ぬる。これは私の日記
だ、わしが死んだら皇帝陛下にさしあげるのぢや……。」

アンドレーエは「承知致しました。」と簡單に答へて父の手に接吻し
て懇に別れを述べようとする、父は、「アンドレーエ、お前に死なれる
と老年のこの私は……。」と聲を顫はしたが、「併しニコライの名を耻か
しめてはならんぞ。」「御心配には及びません。唯一つ御願があるので
す、若し私が戦死した後で生れた子が男の子で御座いましたら、何卒
此處で御育て下さるやうに。」と頼んでアンドレーエは父に別れを告げ

た。父は唯一言、「行つて来い！」と叫んだ。

アンドレーエーが父の室を出ると夫人と妹とは、「何うなすつたの？」と一緒に尋ねた。アンドレーエーは答へなかつた。

「貴郎、もう！」と夫人は夫に取絶つて咽び入る。アンドレーエーは静かにリザの手を取つて椅子に着かせて、マリヤに「左様なら！」と挨拶して室を出た。

十一

千八百〇五年十月、露軍は、ボロディノの堡壘附近に集中した。クツゾフ元帥の本營も此處にあつた。十月二十三日、歩兵の一箇聯隊は、市より半哩離れた處に集つて元帥の檢閲を待つて居た。

聯隊長は、片頬丈に髯のある、赭顔の老士官でその聯隊に全力を盡してゐる。今や檢閲の報告を受取つて急いで隊形を整へさせてゐる。

横列の前を除行して、ずつと見渡したが、俄かに立ち止つて、「第三中隊長！」と叫んだ。返事がなかつた。

「第三中隊長！聯隊長が御用！」と副官等も口々に呼んだが出て來ないので探しに出掛けると、その第三中隊長は列後からの、そりと出て來て聯隊長の前に立つた。其顔には、生徒が記憶えて居ない學科を暗誦させられる時のやうな心配が讀まれる。聯隊長は、じつと視て「お前の部下の兵卒に、婦人の上衣を着たのが居る、どうしたのか？。一體お前は何處へ行つて居たのか？檢閲のあるのに何故隊外に離れてゐるのか？」ととなりつけた。「聯隊長殿あれは免官されたドロコンフです。あの服装は聯隊長殿が御自分でお許しになつたのです。」

聯隊長は、ぐつと問へたが、ぐわつとした怒りは止まない。ドロコンフに進み寄つて、「貴様、その上衣は何だ……軍曹……脱がせろ！」

と叫んだ。「元帥閣下！」と此時歩哨が叫んだ。聯隊長は指揮刀を抜いて列を整頓した。樹蔭の道を、青く塗つた馬車が軽く走つて来た。馬車が止まると、中からクツゾフ元帥が塊地利の某將軍と低い聲で話をしながら降りて、徐かに此方へ歩を運んで来る。

二千の兵士は、息を殺して靜肅を保つた。聯隊長は、「閣下、萬歳！」と叫んだ。元帥は丁寧^{ていねい}に檢閲する。元帥の側に居る綺麗な副官は、公爵アンドレーである。元帥が第三中隊の前に留ると副官は、「此中隊に免官されたドロコンフが居ります。彼の男です。」と告げる。元帥は、ドロコンフに戒めを與へた。やがて檢閲を了ると馬車に乗つて歸つた。此聯隊は、檢閲の後中隊に分れて、各々定め^{さだめ}の宿舍についた。聯隊長は中隊長にドロコンフの此頃の様子を聞くと、服務は規則正しくするが、何も短氣で直ぐ野獸のやうに暴れ出すと答へた。聯隊長は、可哀

さうな奴だ、なる可く大目に見てやれと云ひ付けた。

今迄わざと面會を控へてゐた舊友の騎兵旗手ザコフは、今日ドロコンフの處へやつて来て、「如何か？」と機嫌を尋ねて、「今晚來い！」と云つたが、ドロコンフは昇進する迄は酒もカルタもやらぬと答へた。

檢閲から歸つたクツゾフ元帥は、塊地利の將軍と共に戰略を講じたが、二人の意見は一致しなかつた。元帥はもう暫く時機を待つて後に戦はうといふ意見で、その理由を大侯爵フェルディナンドの手紙や、間牒からの報告によつて説明した。副官アンドレーは以前とは全く變つて快活になつてゐる。クツゾフ元帥も舊友なるポロコンスキー老侯爵の宜しく頼むとの手紙に對して貴下の御子息に於て好箇の副官を見出した事を喜ぶ旨を答へた。アンドレーは士官の間に二様に評判

された。一方で必ず大勳功を樹てるだらうと賞讃するかと思ふと一方ではいやに傲慢な奴、冷淡な奴と疎んじた。

アンドレーエーが應接室へ来た時、マツク將軍の敗報が来た。それと殆ど同時に頭を緋帯した將官が来て元帥に面會を求めた。元帥が出迎へると聲もきれくくに、「私はマツクです！」と云つた。元帥は丁寧な自分の室へ導き入れて、扉を閉ぢた。マツクの敗戦！口々に相傳へ、陣中は俄かに騒ぎ立つた。

其日騎兵中隊では常の日と變りがなかつた。デニソフは、カルタ遊びに出かけたきりで歸つて來なかつた。ニコライは早朝から馬を乗り廻して居たが、馬を下りると、其鬣を撫で、獨言つた。「立派な馬だ！持甲斐のある馬だ……」

そこへいつもニコライに好意を表する獨逸人がやつて來た。ニコラ

イを見ると、親しげに笑ひかけて「お忙しいですか？」と尋ねたが、例のやうに「埃地利萬歲！露國萬歲！アレキサンダー皇帝萬歲！」と叫んだ。

ニコライは兵舎へ歸ると間もなく、デニソフも歸つて來た。渠は光つた黒い眼をした赭顔の小男である。今日も賭をして負けて歸つて來て、「彼處には女もあるが、此處では飲む丈である。」などと云つた。其處へ人の來る足音がする。「小隊長だ」と云つてデニソフはニコライに金貨の入つて居る財布を投げて、「如何程残つて居るか數へて早く枕の下へ隠して呉れ」と頼んだ。近く近衛から轉任して來た小隊長テルニャンローストフは、「おい、ガリック渠がロストフに賣つた馬の名はよく君に似合ふねえ。」と云ひかけて、此男の癖として話す時に對手から目を外らして、「今朝君の乗つて居たのを見たよ。實際よく似合ふ……。」と續けた。其の

馬は七百留^{セツブン}で買ったが實は半價位^{はんげい}のものである。

四六

小隊長と厩の階段の處で別れてニコライが室に歸つた時デニソフも戻つて来て、先刻の財布を探したが、見つからない。ニコライは慥かに頼まれた通りに枕の下に置いた筈なのに、其處にないので、は心當りがあると云つて、テレヤニンを探しに本部へ行つて見ると、テレヤニンは今食事中で、財布から新しい金貨を出して、給仕に何か命じてゐた。其の金貨には慥かに見覺があるのでニコライはつか／＼と進み寄つて、一寸財布を見せて呉れと云ふと、テレヤニンは何食はぬ顔で財布を投げ出して見せたが顔は見る見る眞青^{まっさく}になつた。ニコライは「此の財布はデニソフのを盗んだのだらう。さあ來い。」と腕を取つて引立てた。始めの中は「何を云ふのか！」とか「失敬な！」とか争つて居たが、しまひに財布を返してあやまつて、「許して呉れ給へ。僕には老い

た兩親がある——。」と哀を乞うたのでニコライは氣の毒になつて、「要るのなら使ひ給へ。」とその財布を置いて去つた。

十三

其晩デニソフの室で激しい爭論が起つた。それは、ニコライが聯隊長に向つて或る士官が物を盗んだと語つたところ、聯隊長は左様な者がある譯はない、虚言奴^{うそつきめ}がと叱つたので、ニコライも負けずに虚言ぢやないと言ひ張つたのだ。士官等はニコライに謝罪を勧めたが、ニコライは有る事を有ると云つたのに謝罪する譯はないと云つて肯かず。「小學校の生徒じやあるまいし今更許して呉れとあやまれるか！」と一圖に張り通さうとする剛情に、デニソフもほと／＼もてあましたが、其處へザコフがやつて来て、「遠征！遠征！マツク將軍は降參した。」と叫んだので、皆爭論はそつちのけに氣負ひ立つ。暫くすると副官からも同様

四七

の報知があつて、明日は愈々此處を出發する事となつた。

五

九月四日總司令官クツヅフ元帥はヴァインナ方面へ退却の途中エンズ河を渡つた。河の兩側には軍隊が屯してゐた。橋を守る爲めの砲列が布かれた。小丘から見渡すと、丘の麓の白い家、赤い屋根、大寺院、橋、橋の兩側に黒い塊になつて居る軍隊、それから遠くうねり行くダニユプ河などが指呼される。露軍は河を渡る事を非常に急いで居る。先づ歩兵が橋を渡り最後に砲兵隊が続いた。デニソフの率ゐる輕騎隊は敵陣と相對して橋の手前に残つて居た。俄かに前面に青い上衣を着けた佛軍が現れた。夕陽はダニユプ河に映じて風死したる夕暮の静けさは、時々喇叭の響と叫聲さけびこゑとに破られた。橋の彼方、戦列の一步先は「生」と「死」との別れ目だ。そこに「苦痛」と「死」とが漂つてゐるのだ。けれども、どうしても此橋は渡らねばならない。敵の屯して居

る山上に一團の煙が湧いた、と見る内に砲弾はびゅうと此中隊の上を掠める。一隊の兵卒は、皆敵の様子と隊長の舉動とを交々に見て命令の下るのを待ち構へて居た。砲弾は連りに飛んで來る。我知らず頭を下げて上官に叱られる者もある。上官は快活さうなニコライを見て、「此度は愈々君の番だよ。」と云ふ。渠は勇み立つた。其處へザコフが來て此橋を焼き拂へと云ふ命を聯隊長に傳へる。「早く焼き拂へ？」との命令が重ねて來る。聯隊長は直に傳騎をデニソフの第二中隊に飛ばして橋を焼き拂へと命じた。ニコライは「占めた、自分の力を試す時が來た。」と心に叫んだ。全員悉く勇ましく戦闘準備を開始した。敵の砲兵と見ゆる一隊から濛々と白煙が立つ、續いて二回三回と立つ。やがて第一の砲聲、續いて煙、砲聲は次第に激しくなるといふ具合で悽愴の氣見ると天地に漲る。其時ネスブトスキーは參謀官の腕を取つて、「見給

へ。一人斃れた！いや二人か？」と顔をそむけて「若し自分が皇帝ならば戦争なんかしない！」

三

敵の砲聲はまだ止まぬ。敵の歩兵は橋の方へ押し寄せて来る。此時ニコライは他の兵士の様に藁の束を持って居なかつたので、橋に火を付ける事も出来ず、何をしてよいかとまごついた。突然胡桃を割る様な音が頭の上でしたかと思ふとすぐ隣の兵士が斃れた。ニコライは二三の兵卒と共に驚いて其傍に進み寄つた。やがて負傷兵は擔架で運び去られた。

ニコライは何ものを探す様に見廻した。遠く映るダニユブの流や、沈み行く日や、空を見た。空は青く静かである。あか／＼と沈み行く日の麗はしさ、遠い山々、霧に包まれた松林、自然は皆平和と幸福とに充ちて居る。「あゝ、彼處には何事もない。此處は前後左右死の影に

充ちて居る。一瞬の後には此夕日も何も見る事が出来ぬかも知れん！」と彼は考へた。負傷者は續々出来る、死を怖れ生を愛する念は益々強くなつた。

十四

クツゾフ麾下の露軍三萬五千は、十萬のナポレオン軍に蹴破られ、奥地利の聯合軍とも分れて、九月九日ダニユブ河を渡つて退却したが、二週日の後退却を止めて、河を隔て、敵と相對した。十一日には、佛軍を攻撃して勝利を得た。此戦に公爵アンドレーは微傷を負うたが、總司令官の特旨により、ブルンの奥地利朝廷(此時、奥朝廷はウヰンナから此地に移つてゐた。)に其捷を傳へる使者に立つた。

公爵がブルンに到着したのは翌日の夜である。彼は直に皇帝に謁見されるつもりでゐたが先づ陸軍大臣に會見する事となつた。大臣は露

五

國の勝利に對して甚だ冷淡であつたので、アンドレーエーは案に相違し勝利を誇る自負心も消え失せて甚だ不愉快であつた。大臣に別を告げた時、大臣は明日は必ず皇帝に謁見出来るであらうと云つた。其夜公爵は舊友の外交官ビリビンの邸に泊つた。ビリビンは厚く待遇した。此處で彼は、始めて長い間の行軍や戦争の苦しみを忘れて幼時から馴らされた驕奢の生活の中に楽しく休む事を得た。ビリビンは機智に富んだ話上手なので、近頃のない面白い夜を過し、さて用意された寢室に入つたが種々の事が考へられて如何しても寢附かれない。目を閉ぢると、大砲の響、小銃の音、砲車の軌る音、敵の叫び聲などが聞える、頭の上には楽しい音をして彈丸が飛んで居る。それ等の幻覺が曾て知らぬ一種の快感を感じさせる。渠は驚いて目を開けて「左様であつた、左様であつた。」と子供らしく笑つて獨言つたが間もなく熟睡して了

語

つた。

翌朝遅く目をさますと、今日はフランス皇帝に謁見する日である事を一番先に思出した。さて久方振で大禮服を着けて、手は縋帶して居るが活氣に充ちた美しい顔をビリビンの書齋に表はして、そこでビリビンや其友と暫らく楽しく語り合つて後出掛けた。

謁見の時アンドレーエーは指定の場所についた。皇帝は彼をみつめて、一寸頭を下げた丈であつた。是が濟むと拜謁を仰せ付けられ、皇帝から種々御下問があつた。其問は甚だ簡單なものであつたがアンドレーエーは一々明細に奉答した。皇帝は非常に満足せられた。謁見室を出ると宮内官は彼の光榮を祝し、陸軍大臣は、彼が特にマリア、テレサの勳三等の勳章を賜はつた事を祝した。皇后にも謁見した。アンドレーエーの齋した捷報は非常に奧地利皇帝の喜ぶ所となつた、クッツフ將軍もマ

畫

リア、テレサ大勳章を賜はり、全軍悉く賞されたのである。

ピリピンはせめて二三日逗留せよと進めたがアンドレーエは振切つて出發した。歸隊して見ると營中非常な混雜で雷ならぬ模様である。クツゾフ將軍の室の扉を排すと中の話聲はばつたりやんで將軍は扉口へ出て來た。アンドレーエが復命しようとする、心こゝにあらぬ體で、「よし、少し待て！」と云つてバラガシオン將軍を送り出し暫くひとり思案に沈んで居た。彼に皇帝との謁見の模様などを問うたのは、それから五分ほど後であつた。

第十五

九月十四日、クツゾフは間牒の一人から佛軍が援路を斷つ爲に進軍中との報を得てクレムスよりラルムツへ退却しようとした。ナポレオンは一舉に露軍を粉碎しようと考へて居るのだ。處々で小迫合こせりあひが

あつて、ニコライの中隊の前面にも時々敵が現はれた。ニコライも次第に馴れて戦争を恐れぬやうになつた。

其日、ニコライは劍を振り、愛馬に鞭打つて敵陣を衝いたが、敵の一騎と斬り結び、敵の突いて來るのを受けとめた、と思ふと後は夢心地である。暫くして斃れた馬と負傷した自分とを見出した。廣い野原に自分獨りとり残された。味方かと思つて助けを乞ふ可く近よるとそれは敵兵だつたので、大に驚いた。今は捕虜になるか殺されるかより外はない。一生懸命に傍の森の中へ隠れたが、もう一步も走れない。幸に森の中には味方の遊騎兵が居た。

ドロコフは常に前線にあつて命を惜まず奮闘し、敵の一士官を捕虜にし、一中隊の前進を止め、戦利品を二箇迄得た。聯隊長は其の殊勳を賞讃した。

タシンの砲兵中隊も勇敢に戦うたが、引揚げる時、砲車が小山の麓に通りかゝると、傷を負うて色青ざめた士官が砲車に乗せて呉れるやうにとタシンに乞うた。彼は今迄數人に頼んだが皆斷られたのだ。タシンは快く承諾した。此士官はニコライだ。タシンは陣營に着いてからも親切にして介抱してやつた。ニコライは種々の事をごちやくと夢に見た。母の顔、ソニヤの瘠せた肩、ナタシヤの笑ふ時の唇、さては今日敵の追撃から脱れた時の事など、とりとめもない夢が續いた。目を開けるとタシンも軍醫もゐない、唯自分ひとりだけだ。ニコライは考へた。

誰も構つて呉れない、誰にも用は無い。家に居たらどんなに心丈夫だらう。どんなに皆が大切にして呉れるだらう。

十六

公爵ワシリは自分の利益の爲めには他人の迷惑などは些とも考へぬといふ風の、一言に云へば世渡り上手な人で、彼人は勢力のある人だから交際して置けば利益になると思へば必ず取り入る。天性の交際家だ。

ビエルは其後ワシリの後見の下にモスコウに居た。ワシリは娘のエレンを嫁にやらうと考へて居る。渠は思ひ掛けなくベヅコイ伯爵の財産と爵位を襲いでからは今迄とは打つて變つた多忙な身の上となつた。今迄彼を疎んで居た者は急に親切になり今迄彼を憎んで居た者も急に愛情が深くなつた。伯爵の三人の姪も今迄の無禮は許して呉れと詫びた。周圍の人々は皆媚を呈する、殊にワシリは傍へ引きつけて離す事はなく、彼得堡へ歸る時はいつも一緒に連れて歸つた。

彼得堡でもモスコウ同様人々は渠を厚遇したが、曾ての友達は今殆ど此處には居ない、ドロコフもアナトールもアンドレーも皆出征

して居る。

若

女官アンナ・バヴロワナもピエルに對する態度が違つて來た。今迄は常に冷笑を以てピエルに接してゐたのが此頃は如何どうなつたらぬ事を云つても一々感服して聞く様になつた。冬の初にアンナから招待狀が來た。其中に美しいエレンも見える筈だと書いてあつた。アンナは其の宴會の夜、ピエルにエレンの美しさを説いて暗に結婚を勧めた。ピエルは家へ歸つて種々と考へた。「エレンは美人だけれど馬鹿だ、兄妹の仲が恠しいと云ふ評判さへある。」などと思ひつゝも心は矢張エレンの美しさに惹かれた。エレンの前へ出ると何だか心こころがもだくして、生なま酔のやうになるのである。ワシリは善く之を知つて居た。

ワシリは檢閲に出掛ける前に親としての義務を果す可く、エレンの命名日ネムデイに小宴を催さうと考へた。

ピエルは「エレンと結婚するのは畢竟自分から求めて不幸に陥る様なものだ。早く此處を去りたい。」と考へたが、併し矢張こゝに居たい心地もして「エレンは馬鹿ではない。前には誤解して居たのだ、又決して不徳な女ではない。」とも思ふ。少しも心が定まらない。

命名日の祝には近親の數人丈を招いた。來客は今晩がエレンの運命の決まる日であると云ふ事を知つて居る。ピエルとエレンは並んで席に着いた。ピエルは今夜の主賓たる事を知つて嬉しくもあるが又不愉快でもあつた。何もかも無我夢中である。食事が濟むと渠はエレンと他の室へ行つて沁々と話をした。ピエルは今エレンと結婚したいと云ふ考への外は何もない。そこへやつて來たワシリは突然に娘を嫁に上げようと云つた。ピエルは黙つてゐた。が、心の中で「これが運命だ。善くても悪くても仕方がない。」と思ひ「何を云つても遅い。もう

六

決つたのだ——。」とも思つた。斯うしてビエルとエレンの結婚は成立した。

三

十七

十二月にボロコンスキー老公爵は公爵ワシリから子息をつれて訪問すると云ふ手紙を受取つた。公爵はワシリが、今日の地位に昇つた徑路について慊らぬ處がある。殊に此の手紙で渠の意中を推測して輕侮の念が起つた。公爵はワシリの噂を聞いても直に腹を立てる、ワシリの到着する今日は殊に機嫌が悪いので家の人々はつとめて避けるやうにしてゐた。リザも今日は終日居間から出まいと決心した。彼女自身にも其理由は分らぬが、何となく父が恐い。父に逢ふと直ぐ顔色が青くなる。

其の夜ワシリはアナトールを伴つて來た。アナトールは富貴の人の

娘ならばいつでも嫁に貰はうと考へた居る。二人は用意の室へ通されると、アナトールは途すがら屢々繰返した事だが、「御父さん、冗談は兎に角、非常な醜婦ださうですよ。」と云ふと、父は「馬鹿な事を云ふな。公爵を尊敬せにやならんぞ。」

「面白くない事を云つたら私はすぐ歸りますよ。」

「短氣をしちやならんよ。お前の運命の定まる所だから——。」

マリヤはアナトールの前に出るのが何だか怖ろしいやうに思はれたが、唯リザとブルエンヌの世話をして呉れるのに任せた。二人は甲斐々々しく化粧や支度の手傳をして、如何にして美しく見えるかと様々に苦心したが少しも美しく見えない。顔や姿に缺點があるのだから仕方がない、着飾つて見ると、却て平常よりも引立たない。マリヤは夫になる可き人を想像して見たり、楽しい結婚生活を心に描いて見たりし

三

たが、斯様な醜い顔ではとても結婚なんか出来ないと思つても見
た。促されて客間へ出ると、ヴシリ父子、リザ、ブルエンヌ、皆既に
揃うてゐた。マリヤは初めてアナトールを見た。想像以上の美男子だ
が氣取つた風をしてあまり口敷を利かぬ。會話は次第に活氣を帯びて
來た。ブルエンヌは話の中に巴里と云ふ言葉が出ると、それを題目と
してアナトールに話しかけた。アナトールは此の佛蘭西婦人の間に答
へたり、自分から進んで種々聞いたりなどした。而して「あゝ此女は
美人だなあ、而して伶俐さうだ。」と思つた。

暫くすると老公爵が出て來て、一寸マリヤを見て「馬鹿者の様な
服装をして居る、耻知らずが——。」と不快を感じながら、つか／＼と
ヴシリの側へ寄つて簡單な挨拶をした。ヴシリは如才なく挨拶を返し
て「此が二番目で御座ります、何分宜しく。」とアナトールを顧みて挨拶

拶さした。公爵はアナトールをよく見て「あゝ立派な若者だ。立派な
若者だ。」と賞めた。そして今度はマリヤの髪に眼を移して小言だらた
ら、マリヤは泣き度くなつた。公爵は暫くアナトールと戰の話などし
てゐたが、やがてヴシリを誘うて自分の居間に戻つた。ヴシリは二人
ぎりになると、すぐ自分の願を述べた。マリヤをアナトールの嫁に貫
ひたい、アナトールは無論天才といふのでは無いが親切な親孝行者で
あると云つた。

客間に残つた三人の婦人はアナトールを中心にして愉快な話を續け
て居る。女計りの世界にゐる女達は闇の中から明るみへ出て來た様に
急に陽氣になつた。マリヤも自分の醜い事などは忘れて了つて夫にな
る人の美しい顔に見惚れて優しい、男らしい、氣高い人と思つた。「あの
人には私がこんなに思つてゐる心持が分るか知ら、私が嫌つて居ると

思やしないだらうか。」と考へて、出来る丈愛嬌を作らうとしたが、彼女にはそれが出来ない。アナトールはマリヤを、思ひ切つて醜い女だなあと思つて居る。ブルエンヌはアナトールとは一寸話をした丈で、二人の心が互に打解けてもつと親しく話をする機会があれかしと思つてゐる。マリヤが父に會ひに行つた後で、二人は温室で出逢つた。

マリヤが父の居間に行くといふ父は今日は非常に機嫌がよく、直にワシリの申出を話して、自分の主義として決して強ひはせぬ、お前の考へ一つに任かす、居間へ行つて善く考へた上、一時間後に決心の旨をワシリの前で話せといふ意味を告げた。彼女が心も空の體で自分の部屋へ戻る途中、温室の中で囁く聲がしたので、見るとアナトールはブルエンヌに身を寄せかけるやうにして、彼女の耳に口を當て、親しきやうに話をして居る。ブルエンヌはふとマリヤを見てはツと驚いて立上つた。

一時間過ぎてマリヤが父から呼ばれた時マリヤの室ではブルエンヌが泣いて彼女に罪を謝してゐた。マリヤは優しく慰めて室を出た。父の室へはひると、ワシリは彼女の兩手を取つて「子供の運命は貴女のお考へ一つで決まるのです。」と云つた。父は大聲で「嫁にゆくか、どうだ……どちらだ……返答をせい！」

「私は何時迄もお父さんと御一緒に暮ら度う御座います……嫁に參る事は嫌で御座います。」と彼には父とワシリを見てきつぱりと言つた。父は「馬鹿な！馬鹿な！」と云つた丈であつた。ワシリはもう一度善く考へて返答して呉れと云つたが、マリヤは如何しても嫁には行かぬと云ふ。父はちやもう決つた、部屋へ歸れと命じた。今はワシリも仕方がない。マリヤは部屋へ歸つて斯う考へた。「私の考は他の考とは違ふ。人の幸福を喜び身を人の犠牲とする事を樂む。出来る丈ブル

エンヌを幸福にしてやりたい。彼人を深く思つて居るのだからどうか二人を一緒にしてやりたい、父さんや兄さんにも頼んで——。ブルエヌは外國で淋しい月日を送つて居る不仕合な女だから。」

十八

ロストフ家では出征中のニコライから久しくたよりが無かつたが、冬も半になる頃、ニコライから一通の手紙が來た。伯爵は手紙を持つて急いで居間へはひつた。其後ロストフ家に居るアンナもあとから續いてはひつた。伯爵は手紙を持つて泣いたり、笑つたりして居る。どうしたのかとアンナが聞くと「ニコラシユカから——手紙が——負傷した——妻には如何云つたらよからう？」と涙に聲をとぎらす。アンナは夕飯が濟んだら自分から話すからと云つて慰めた。ナタシヤからアンニヤにその話をする、アンニヤは「ニコライが！」と眞青にな

つて泣き出した。ナタシヤも貰ひ泣して怪我は大した事ではない、今度昇進して士官になつたと云ふ事から手紙も自筆だといふ事を告げて慰める。ピチャは「女といふものは泣蟲だな、昇進したのも喜ばずに——。」と利口さうな事を云ふ。アンナは手紙を持つて伯爵夫人の室へ行き靜かに事の由を告げたが、夫人は思つた程には驚きもせず、悲みもしなかつた。後で家族は皆寄つて手紙を読んだ、而して皆から各々に手紙を書いて送る事にした。父は費用として六千留に種々のものを添へて送つた。アンナは先づボリスに送り、ボリスから届けさせる方が便利だと云つたので、さうする事にした。

十一月二十四日、クツゾフの軍隊はラルムツ附近に屯した。翌日は露埃兩皇帝の閱兵式がある筈である。近衛隊も此閱兵式に参加する事となつた。其日ニコライは金と手紙が届いて居るといふボリスからの

手紙を受取つた。彼は旗手に昇進したが、借金に責められて未だ新しい服も買ふ事が出来ず、汚れた騎兵時代のをつけて居た。この手紙を見るとすぐ出掛けた。

近衛隊は丁度遠足の様に呑氣に行軍した。ボリスは行軍中常にベルグと一緒に居た。ベルグは上官の氣に入つて大尉に昇進して一中隊を指揮して居る。ボリスはビエルの紹介状でアンドレーエーと知己になり、其推薦によつて總司令官の副官にならうと思つて居る。ニコライが訪ねた時にはボリスとベルグは將棋をさして居た。逢つて顔を見るや互に先づ「變つたなあ！」と云つた。父からの手紙の中に或る將官への推薦狀があつたが、ニコライは此様なものは要らんと投げ捨てようとするのを、ボリスは拾ひ上げて「なせ捨てるのだ！此は非常に大事な手紙だ。」と云ふと、ニコライは「なに副官なんかにして

七

貰ひ度かない！」と答へる。ボリスは「副官にでもなつて成る丈戦列へ出ない様にして名を擧げたいものだ。」と云つた。其所へ先刻出て行つたベルグも戻つて来て三人で話をして居る最中にアンドレーエーも來た。彼はよく後輩の面倒を見てやる。今日もボリスが本營の模様や、作戦計畫などに就いて尋ねると、事機密に屬して、今は話せぬが、何れ近い内に話す時があるだらうと答へて、今度はニコライに向ひ「檢閲が濟んだら御出でなさい、私の出来る丈の事は致しませう。」と親切に云つたが、盛に話し立てるニコライの戦争の話に對して信を置けぬ様な口吻で訊き返したのでニコライは「私は實戦に臨んだのだから根據があります。何もせずに居て褒美を貰ふ副官とは違ふ。」と叱るやうに云つたので、アンドレーエーも黙つては居ない、爭論の揚句、決闘もしかねぬ意氣組を見せたが、又一方では體よく宥めて置いて歸營し

七

た。ニコライも直に去つた。

ニコライがボリスとの會つた翌日は、愈々兩皇帝閱兵式の當日である、前列が騎兵、次が砲兵、後列が歩兵と云ふ順序で八萬の將卒は三列に整列した。「用意」の號令がかゝると全隊が波のやうに動く。「氣を附け！」の號令は全軍を死の如く靜かにさす。やがて皇帝臨御、合圖の喇叭が吹奏される。其反響の消えぬ中に若々しい皇帝の御聲が聞える。「萬歳！」と第一聯隊は一齊に叫んだ。ニコライはクツゾフの麾下にあつて第一列の一番先頭に居たので一番先に皇帝を見た。それが一種の自負心を彼に喚び起した。「萬歳！」の叫びは各隊に起り、聯隊毎に歓迎の曲が奏せられ、夫等が一緒になつて耳も聳せん計りだ。ニコライは喇叭隊の側に居たから皇帝の動作がよく分つた。皇帝は佛蘭西語で埃地利皇帝に何か云ひかけて微笑された。又聯隊長を召されて

何か簡單に訓示せられる。ニコライは「若し皇帝が私に話をして下さつたなら、私は喜びの餘りに死ぬるだらう。」と考へる。皇帝が士卒に訓示せらるゝその御聲は天から降つて來るやうに思はれる。「皇帝の爲に死なう！死あるのみだ。」とも考へる。皇帝に扈從してゐる士官の中に騎馬のアンドレーを認めて昨夜の争を思ひ出し、一つ決闘しようかと考へて見たが、「いや今は問題外だ、そんな事を考へたり話したりするのは——。」と思ひ直して、喜びに明るくされた心の中に、「こんな事を争つて何になる？私は世界の人を皆愛する、何人をも許してやる。」と考へる。式が了ると人々は三々五々と群をなして語り合つた。而して口々にアレキサンダー皇帝の徳を頌した。而して全軍の將卒は皆我軍の必勝を信じた。

閱兵式の翌日ボリスは最上等の制服を着けてアルムツに出掛けた。これはその地なるアンドレエーを尋ね、その好意によつて副官にして貰ひ度い爲であつた。「ニコライは副官なんか下らんといふが、自分はさうは思はない。此機会を逸さん様にしたくない！」と考へて、大本營のある町を見ては此處に居たいと思つた。其日は逢へなかつたが、翌二十七日再びアルムツに行つてアンドレエーに面會を求めると、彼は執務中で、何か士官に小言を云つて居たが、ボリスを見るとすぐやつて来て、矢張副官志望か、實は此方でも色々心配して居るのだと云つた。而して、皇帝の親戚なる侍從武官ドルゴルコフ公爵に紹介してやらうと、少しも面倒さうな様子も見せず、直に彼を連れて面會に出掛けた。ドルゴルコフは丁度會議中で、非常に忙しさうであつたがアンドレエーがボリスの事を頼むと快く承知して出来る丈の事は取計

らはうと親切に云つてくれたので、ボリスは非常に嬉しかつた。翌日は愈々出發なので、オウステルリッツの會戰迄はボリスが兩公爵に逢ふ機會がない。

策戰會議に於てクツゾフ將軍の意見は通らなかつた、將軍は明日の戰敗を期しつゝも、おしきつて意見を貫くわけにも行かぬ。

アンドレエーは、「明日は數千の命が失はれるだらう！或は自分の命も——。左様だ、明日は戰死するかも知れん。」と、俄かに死を考へて恐怖の情を催した。聯想がそれからそれへと續く。父と妻とに別かれた時の事から、未だ生れぬ赤兒の未來までも思ふと何とも云へぬ悲みが湧く。その悲みを紛らす可く外を歩いて見た。空は曇つて雲を漏るゝ月影は幻惑的な光を漲らしてゐる。「明日だ！明日だ！明日だ！明日が自分の最後の日だ！」と恐しい戦場の光景を心に描く。「戰死、負傷、何れも怖

ろしい事はないが……併し自分の命は自分にとつても他の者——父、妻、妹——にとつても貴いものである。名譽の戦死はいゝが家族を犠牲にせねばならぬ、死にたくない！」

共

ニコライは陣中に於ても極めて活潑であつた。會戦の前夜三人の騎兵を連れて、誰も先立つものゝ無い怖しい霧の中へ偵察に出掛けた。川の向うへは行くなといふ上官の命令をも聞かぬ振して、どしどしと進んで行つて、其の偵察の模様を精細に復命した。ニコライは此の中隊は後方勤務になるかも知れんから是非第一中隊に轉じさして呉れと上官に乞うた。その勇氣は人々を感嘆させた。

敵軍からは盛に叫び聲が聞えた。此時は檢閲に來たナポレオンの訓示が全軍に讀み上げられた時であつた。兵卒は皆皇帝を仰ぎ見て、藁の

束に火をつけて盛に萬歳を唱へたのである。

二〇

夜は明けた。霧は深く、十歩の先を辨へ難い。灌木も大木の様に見える、平地も崖の様に見える。全軍は霧の間を縫うて、小山を上り、谷を下り、長い間進軍を續けたが未だ敵は見えない。進行中止の命令が下つた。止まる時は何時でも隊伍が混雜し、列中に話聲が起つてすべてが秩序を失ふ。

朝の十時、霧も段々消えかゝつた時ナポレオンは諸將を率ゐて小丘の上に現はれた。未だ戦闘は開始されない、今日はナポレオンに取つても大事な日である。朝の中二三時間の就眠で心を爽かにして「萬事意の如くなる。」と云ふ幸福の影を顔に示してゐる。日は霧の上に昇つて、ひろい野に輝いた、ナポレオンは美しい小さい手から手袋を脱

七

ぎ、將官を麾いて戦闘開始の命令を與へる、二三分と經たぬ中に主隊は露軍に向つて烈しい進撃を始めた。この進撃は露軍の不意を襲うた、見る／＼露軍は崩れ立ち總司令官クツゾフも頬に負傷した。此時アンドレーエーは旗を掲げ、歩兵大隊の先頭に立つて勇ましく進んだ。前面の敵は盛んに彈丸を飛ばす、兵卒は右にも左にもばたき／＼と倒れる。其中にアンドレーエーも倒れた。仰向けに倒れた彼は無限の空を見あげた。彼は生れて始めて空の崇高な事を知つた。「此無限の空を除けては萬物皆空である。總て詭詐だ。あゝ沈黙と平和……。」

バラガシヨンの麾下にある右翼軍は九時になるまで戦を開始しなかつた。ドロゴルコフは開戦を勧めたが彼は同意せぬ、即ち總司令官の命を受く可くニコライが其の使を命せられた。「若し皇帝に謁見が叶はば皇帝に申し上げよ」との事で彼は非常に喜び勇み、危地を冒して突進し

た。ポリスにもベルグにも行き會つた。彼は皇帝を見る事が出来た。皇帝は顔色は蒼白めて居らるるが至極快活の様に見受けられた。皇帝が負傷したといふ流言も偽であつたと云ふ事を知つて彼は欣んだが、御前に入る事を躊躇して居る中に皇帝が去られて、親しく謁見の機會を失うたので失望云はうやうもなかつた。

午後の五時露軍は戦全く敗れて、百餘の大砲が皆敵に奪はれた。

アンドレーエーは旗を手にして鮮血の中に斃れたまゝで悲げな聲で唸つてゐた。やがて唸り止んで我に歸つた時靜かに考へた。「あゝ今朝見た空は何處にあるか、生れて始めて此様な苦痛を嘗めた——。」

蹄の音に目を開くと又高い青い空が見えた。その蹄の音は二人の副官を連れたナポレオンがとり残された死傷者を見廻るのであつた。ナポレオンは側によつてアンドレーエーを見つめて「美男子だ。」と云つた。

其聲が蚊の鳴聲位に聞えた。此蒼々として高い無限な大空と比ぶれば
ナポレオンも小さいつまらぬものにしか見えない。アンドレーは捕
虜として連れ行かれた。而して又ナポレオンを見た。ナポレオンは戦場
で見覚えのある彼に、「若者よ。如何思ふか。」と問うた。彼は唯その顔
を打成つたまゝ、何とも答へなかつた。それは空なる勝利を喜び、小な
る虚榮を誇る淺薄な人間にもいふのが厭であつたからである。

熱は益々烈しくなつた。彼は種々のものを夢みた。父、妻、妹、未だ
生れぬ子供、ナポレオン、高い空――。

翌朝軍醫は彼を診察して「回復の見込がない。」と云つた。

二十一

千八〇六年の始めにニコライ・ロストフは恩賜休暇があつたのでデ
ニソフと共にモスコウへ歸省した。馬車の走るのも甚だ待遠しく、我

家の灯影を認めると矢も楯もたまらないので、酒代を増して急がせた。
家に着くと丁度晚餐を終へたところであつた。家族の人々は夢かと計
り喜んで、伯爵も夫人もナタシヤもソンニヤも皆彼の周圍に集まり、
喜びの涙を浮べて種々の事を聞いた。デニソフは他の室へ通されて厚
くもてなされた。

翌朝ニコライは十時になつて漸く起きた。ソンニヤもナタシヤも晴
衣を着て如何にも嬉しさに打連れてニコライの室へ來たが、ソンニ
ヤはすぐ逃げる様に出て行つた。ナタシヤは唯もう何の譯もなく一言
葉毎に笑つて居る。ニコライも家を離れて一年半の間笑つたことの無
い顔に今日は笑を漲らす。ナタシヤは兄の口髯に觸つて見たりなどし
て種々の事を聞く。ニコライはソンニヤが逃げた理由を聞くと、それ
には長い話があると云つて、先づソンニヤは自分の本當の親友で、自

分が如何程彼女を愛するかと云ふ事を示す可く腕を焼いて見せたのだと云つて腕を見せた。兄はその愛らしい眼を見て、子供の頃の楽しい日を思出した。限りなく愛する證據に腕を焼く——それも馬鹿々々しいとのみは思へなかつた。

ソンニヤは昨夜見て美しいと思つたが、今日は昨夜よりもつと美しく見えた。

家族一同が客間に集まつた時、ソンニヤに逢つたが何から話をしていゝか判らなかつた。どうも前のやうに馴々しくは出来なかつた。デニツフは新しい軍服をつけてやつて来て非常に四角張つて挨拶した。今日はまるで別人の様である。

斯くてニコライは家族等には可愛がられ、友人知己からは勇士として尊敬され、楽しい日を送つて居た。今は軍隊に居た時とは餘程考へも

變つて來た。而してどうもソンニヤとは親しめないで疎ましくした、ソンニヤを愛する心には變りはないが、何物よりも自由を愛する念が強くなつたからだ。「未だ見ぬ女の中にもソンニヤの様なものは澤山あるに違ひない。自分は年が若いから戀するのは何時でも出来る。だから今は戀人は持つまい。」とかう彼は考へるやうになつてゐたのである。

三月の始めになると、ロストフ老伯爵は英吉利俱樂部で催す可きバラガシヨン歓迎の宴の準備に忙しかつた。アンナが來た時、話の序にピエル夫妻の事を尋ねると、彼女は苦い顔をして「あゝ本當にさうだつたら如何致しませう。折角幸福に暮して居ますのに——。ピエルはほんとに高潔な心を持つて居ますのに——。」と云つた。それは何事かと問ふと、アンナは深い溜息を吐いて「あのドロコフがエレンと仲善になつたと云ふ噂ですよ。」と言つて聲を潜めて、「何でも始めピエルが

ドロコフを彼得堡の自宅へ連れて行つたのです。今エレンが此處へ來ると又あの人もついて來たのですよ。」と同情に堪へぬ様に云つた。

二十二

三月十五日午後二時、アウステルリッツ戦役の勇士バラガシヨン公爵を正賓として盛大な宴會が英吉利俱樂部で催された。

始めアウステルリッツ會戦の公報がモスコウに着いた時、市民は夫を信じなかつた。やがてその真相が分つたが、道理の上からはどうしても露軍の敗北は考へられないので、モスコウでは事の不思議に數へ立てた。敗れはしたれ、露軍が善戦した事は何人も認めてゐる。殊に二倍の敵兵と力戦したバラガシヨン公爵をば英雄中の英雄と取沙汰した。バルグの勇敢も評判になつて居る。アンドレエーは死んだものとして何の消息も傳へられない。

歡迎會は非常に盛大であつた。ビエルも出席してドロコフやニコライと相對して席をとつてゐた。ビエルは相變らず盛に飲んだり食つたりして居るが、常とは違つて何となく物思はしい風情であつた。

ビエルは自分も密かにドロコフと妻との關係を疑つて居た處へ今朝二人の祕密を知らぬは汝のみだと云ふ意味の無記名の手紙が來た。彼は妻は潔白である、手紙は何者かの惡戯であるいたづらと考へて見たがドロコフの美しい顔を見ると何だか怖ろしい様な氣持がする。頭は火の様になつて居る折柄ドロコフが一寸氣に入らぬ事をしたので、抑へて居た鬱憤が一時に發し、遂に決闘を申込んだ。ドロコフも後へは引かない、遂にネスワトスキーはビエルの、ニコライとデニソフとはドロコフの介添人となつて決闘をする事となつた。

其日が來た。二人は彈丸を込めた短銃を手にして相對した。先づビ

エルが発射する。ドロコフは一發で傷ついた。今度はドロコフの番である。冷やかに笑つても目には憎みが燃えて居る。負傷の死力を出してピストルを上げた。ビエルは深く悔恨を感じつゝ腕を垂れ足を廣げて胸を向けて的に立つた。介添人は皆眼を閉ぢた。銃聲と同時に「失敗つた。」と云ふ聲がして、ドロコフは倒れた。ビエルは顛顛をつかんで森の中に駆け込み雪の中を走りまはり、夢中で譯の分らぬ事を叫んでゐたがネスプロトスキーに連れられて歸つた。ニコライとデニソフはドロコフを起して車で連れ歸つた。ドロコフは母に此事を知らしてくれぬ様にと頼んだ。

決闘をやつた其晩ビエルは自分の寢室へはひらなないで、父の死んだ室へ行つて今日の事を考へた。「自分は妻の愛人を殺した。どうして斯ういふ結果になつたのか。」と自問して見る。「愛なき結婚をしたからだ

つまり自分を欺き、妻を欺いたからだ。」と自答する。「彼女が悪いのだ！皆彼女が悪いのだ。」と強て結論をつけたがまだ何處かに満足出來ぬ處がある。其夜直に用意して翌朝早く彼得堡に立つつもりであつたが翌朝目をさますとエレンが枕元に立つてゐて、「如何云ふお積りで決闘なすつたの？」と問うた。彼は黙つてゐた。「貴郎はすぐ他の云ふ事をお信じなさるのねえ。ドロコフが私の戀人だなんて、ほんとに馬鹿々々しい。唯お友達なんぢやありませんか、それといふのも貴郎と面白くないからですわ。ほんとにつまらない方——貴郎の様な方を夫にもつた女は世間にあまりありませんよ。」と云つた。ビエルは大に怒つて殺して了ふと迄云つた。ビエルが遂にエレンと別居する事として彼得堡へ歸つたのはそれから一週間後であつた。

アウステルリッツの戦報と共にアンドレーエの計がルシャゴウリに傳はつてから二箇月を経た。アンドレーエの死體は何處にも發見せられないし又捕虜名簿の中にも其名は見えなかつた。總司令官クツゾフからの手紙が老公爵に來た時、老公爵は手紙を讀むとすぐにマリヤを呼んだ。マリヤは雷ならぬ父の顔色を見て今迄に經驗つはえのない怖ろしい不幸を豫覺した。「アンドレーエが……」と父は一言云つて涙に咽びながら、總司令官から手紙の來た旨を語つて、「戦死したのだ！手紙によると——」と大聲で續けた。聞く中にマリヤは悲みと喜びとを超越した心地になつて「恐怖」も「父」も何も彼も忘れた。リザにはお前から知らせよと命じられたので、夫人の部屋に行つたが、幾度か云ひ出さうとして、その無邪氣な様子を見ると、つい打出し兼ねて、兎に角お産の濟む迄は此の悲しい報知は隠して置かうと決心した。

六

父は最愛のアンドレーエの計に接してからめつきり年が寄つて日毎に衰弱して來た。

リザが急に産氣づいたので邸内は大混雜である、マリヤはリザに接吻して「お氣を慥かにね。」と勵ます。リザは子供らしく泣いて得堪へぬ苦痛を訴へる。乳母は「お驚きになる事は御座いませんよ。お醫者がゐなくても大丈夫で御座います。」と勵ます。其夜は誰も寝なかつた。再び冬が戻つて來たやうな、寒い風の雪を吹く物凄いや夜である。皆、迎へにやつた醫者を今か今かと待つて居る。乳母は窓際によつて「誰か參ります、提灯が見えます。」と云ふ。マリヤが醫者であらうと思つて出迎に出ると話聲が聞える。聞き馴れた聲なので、アンドレーエかとも思つたが、いやそんな筈はないと心で打消す。處がそれは思掛けなくも、其アンドレーエであつた。「マリヤ私の手紙はついて居るか。」とアンド

完

レエーは妹の顔を見るや手を取つて尋ねた。妹は頓には言葉も出なかつた。アンドレエーはすぐに夫人の部屋に入つた。

リザは白い帽子を被つて寝てゐる。今は少し惱も去つて顔色も明るい。夫はつか／＼と進み寄つて枕元に立つたが、リザは知らない。が其目は「私は貴郎あなの助を待つて居たのよ、誰も来ない、誰も来ない——。」と云ふ様に見えた。又苦痛が始まる。乳母はアンドレエーに部屋を去る様にと注意する。彼は此處を去つて隣の室の中を歩き廻はつて居ると急に赤兒の泣聲がきこえた。彼は窓へ腕を置いて喜びの餘りに子供のやうに泣いた。ところが慌だしく其室の戸が開いて醫者がうろたへた風で出て來た。ついで婦人連も出て來たが、誰も一言も云はぬ。アンドレエーが怪んで妻の室へ行つて見るとリザは死んで居た。五分間以前に見たと同様の姿勢をして——。

アンドレエーは父の室に入つた。父は何も彼も知つて居た。一言も云はずに、老いの腕にアンドレエーの首を抱いて子供のやうに泣いた。

一八〇六年の秋、再びナポレオンとの戦争が始まるといふ噂が盛に取沙汰された。

ニコライはドロコフの決闘の介添人となつたといふ廉で免官される處だつたが父の運動で内分に濟み、新たにモスコウ總督の副官に任せられた。其後ドロコフとは益、親しくなり、ドロコフは屢、ロストフ家を訪問する内にソンニヤと相愛する様に見えたが、ソンニヤはドロコフが結婚を申込むと即座に斷つて了つた。ニコライはあとで此の話をナタシヤから聞いたが、しかし彼は相變らずドロコフを遊び相手に

してゐた。其中カルタで四萬三千留^{ループ}も負けて、尻を父にもつて行つた。父は非常に當惑したが、仕方なしに出してやつた。ニコライはポーランドに居る聯隊へ出發した。

デニソフもナタシヤと舞踏などして、遊び友達になつてゐる中いつか相愛するやうになり、遂に結婚を申込んだ。伯爵夫人は大に怒つた。ナタシヤは非常に悲んだが、デニソフは夫人に罪を謝して、すぐロストフ家を去つた。

二十四

ピエルは彼得堡行の途上、トアツホーク驛で馬を待つてゐた。驛長夫婦や給仕が様々に親切を盡して呉れるが、ろく／＼^い應へもせずじつと思ひ沈んでゐる。自分で自分の事が分らない、種々の疑ひが胸に湧き起る。「邪とは何ぞ」「正とは何ぞ」、「人生の終極の目的は何か」「生

とは何か」「死とは何か」是等の疑問は唯死の一語に解ける。「死ねばそれで萬事解決がつくのだ。」併し死といふ事は唯考へてさへ恐ろしい。「死は今日來るか、明日來るか分からん。」と思ふと心は暗く結ばはれる。本を讀んで氣を晴らさうとしたが心は唯深く沈むばかりだ。「自分の知つて居る事は何も知らぬと云ふ事だけだ。此が人間の智慧の最高位だ。」とも思つて見る。何を見ても腹が立ち、何を見るのも厭^{いや}になる。併しさう思ふ心の底に一種不思議の快感を覺えるのである。

其處へ驛長が一人の旅客をつれて來た。豫め、此の旅客の話相手にされるのだと思ふと何だか不安の感がある、旅客は暫く本を讀んで居たが、ピエルを見ると、ベツツイ伯爵ぢやありませんかと尋ねて、話をしかける。ピエルも少し心が和^やらいで、話をするのも苦痛とは思はない様になつた。旅客は盛んに「神を信せぬ人は不幸である」とか「智識

によつては神を知る事が出来ぬ」とか繰返して懇ろに神の道を説くのであつた、ピエルはそれを聞いて結ばほれた思ひの次第に解けゆく心地がした。其旅客は別れに臨み、「彼得堡へ着いたらピラスキー伯爵にこれを御渡しなさるがよい。」と何か二三行計り書いた紙片をピエルに與へ、孤獨と瞑想とによつて新生涯に入る可くすゝめた。ピエルは後で乗客簿を見てその人は共済組合の有名な一員バズデエフで有るといふ事を知つた。彼は彼得堡へ着くと誰にも知らせず何處へも行かずひとり閉ぢ籠つて宗教書を読み耽り大に悟る所があつた。或日曾て一寸交際した事のあるピラスキー伯爵が突然やつて来て、「もし貴君が共済組合に御入會なさるならば私が名親になりませう。」と云つて、突然に、貴君は神を信じなさるかと問うた。信じます！とピエルは二度までも繰り返した。伯爵は非常に喜んでピエルを教會に伴うた。教會の庭で

目隠をして式場へ導かれる。やがて目隠を除いて見ると室の中は眞暗で、燈明の仄かな光に照らされた祭壇には、罽毘と棺と聖書とがある。「神」、「死」、「愛」——ピエルは嚴肅なる感に打たれて、人間の愛と云ふ事を思ふた。そこで嚴かな儀式が濟むと七徳を授けられその實行を命せられる。七徳とは一謙遜、二服従、三有徳の生活、四人類を愛する事、五勇氣、六寛仁、七死を愛する事である。殊に最後に死は怖る可きものではないといふ事を委しく聞かされた。

その翌日ピエルが室に籠つて宗教上の問題に沈潜して居る處へヴシリが来てピエルの誤解を責めエレンの潔白を説いて、決心を翻させようとしたが、ピエルは斷然それを拒けた。そして、一週日の後彼は巨額の寄附を共済組合にして置き南方農民の状態を視察す可く出掛けた。別居して彼得堡へ歸つたエレンは、その不幸に同情された。彼女に

同情が集まる丈それ丈ビエルは人々の間に不評判である。

矣

此年の末、愈々第二回の露佛戦争の始まつた折、アンナ・パウロワナは又、茶話會に人々を招いた。招かれたのは皆一流の人々である。普魯西軍の本營から特命を帯びて到着したボリスも來た。彼は今或る將軍の副官を勤めて居る。アンナが何か話をとすゝめると、餘り躊躇もせず、流暢な佛蘭西語で普魯西軍隊を訪問した感想などを話した。ボリスの側に坐して居たエレンは時々その顔を覗き込んで、熱心に聞いて居た。時々旅行の道筋などを尋ねた。話がすむと今晚是非私の家へお出でなさいといふ、ボリスは快諾して尙エレンと睦しさうに話し耽つてゐると、アンナはボリスを呼び寄せて注意した。

翌晩ボリスは約束通りエレンを訪ねた。他にも來客があつてあまり多く話をする事が出来なかつたが、此の會合から二人は非常に親密に

なつた

二十五

戦争は益烈しくなつた。戰場は次第に露國の國境に近づいて來た。到る處ナポレオンに對する咒咀の聲に充ちた。人類の敵ナポレオン――。

ポロコンスキ―老公爵、及びアンドレエーとマリヤとの生活には一變化を來たした。老公爵は地方司令官に任せられ、老軀を君國に抛つ覺悟を以て忠實に勤務した。マリヤは數學の研究を止めた。アンドレエーはアウステルリッツ戦争以來再び戦争に出まいと決心してゐたので、再び戦争の始まつた時、人々は皆歸隊を勧めたが、實戦に臨む事を避け父の部下として働く事とした。父子はまるで反對になつて、父老公爵の非常な元氣に引きかへ、アンドレエーは深い憂鬱に沈んでゐる、殊に此頃は唯一の樂みたる幼兒が病氣なので、一方ならず心配して居た

矣

が、心配の餘りに歸つて見ると大變よくなつて居るので安心した。而して「今自分に残つて居るものは唯此兒丈だ。」と心に叫んだ。

ビエルは南方の領地に着くと先づ監督を呼び集めて自分の意見を述べ、農僕に過度の勢働を課せざる事、婦女小兒には絶対に勞働を課せざる事、今迄の體刑を禁じて唯叱責に止むる事、學校病院養育院等を設立する事などを申渡した。監督の多數はビエルの心持を解しなかつた。ビエルは毎日農僕等と交つて銳意改良につとめたが、さう一足飛には出來ぬ事を悟つた。監督長は表面は從順らしく見せかけながら、裏面では様々な猾い事をして居た。ビエルは大財産を相續したが借金もあり入費も多く全く財政困難の状態にあつた。

二十六

南方から歸つたビエルは、二年振で舊友アンドレーを訪ねた。今

アンドレーの住つて居るボクチャンボは至つて寒村で、其邸宅も質素を極め、以前の豪華の生活の俤もない、ビエルはアンドレーに會つて見てその變りやうの甚だしいのに驚いたが、友情は昔と變らなない。二人は一別以來の積もる話をしたが、談が人生問題に移つて行つた時アンドレーは平生の主張を述べて「自己に悪い事が必ず他人にも同じに悪いとは云へぬ。」と非常に熱した調子で「人には二の惡徳がある——悔恨と病氣の——此の二惡徳を除いて先づ自分の爲に生きようとするのが私の主義です。」と云つた。

「私は單に惡事もせず、悔いもせずに暮らす丈では何もならんと思ひます。今私は自分を犠牲にして生活して居ります、いや生活しようとして居ります、それで私は幸福です。」とビエルはそれに反對した。「併し私の經驗によると、自分を捨て、他人の爲めには云ふが、そ

の他人の爲に盡す心には矢張、愛して貰ひたいとか、賞めて貰ひたいとか云ふ不純な心持が含まれて居るのぢやないかと思ひます。私は唯自己獨りの爲めの生活を始めました。そして非常な満足を覺えて來ました。」

「併しお子さんもありお父さんも妹さんもお有りぢやありませんか、何して全く獨りで——といふ事が出來ますか。」とピエルは稍、熱した。

「併し彼等は自分と同體です、他人とは隣人の事です、例へば今貴君の恩恵を與へて居られるキエフの農民は即ち貴君の隣人なのです。」此言葉を聞いて、ピエルは彼の貧しい農民等に藥を與へ、彼の無智な農民等に教育を與へるのが何故悪いのかと詰るやうに問うた。相携へて露臺に出たアンドレーは、

「學校のお話が出ましたが、教育は彼等に道德的教訓を與へて動物的

生活から脱せしめる事です、處が眞正の幸福は動物的生活にあるものです、だから教育はとりも直さず幸福を奪ふ事になるのです。又病院でもさうです、たとへば負傷した人間を療治する、不具にしても生かして置く。それは却て其本人自身にも苦痛を與へ、又他人にも迷惑をかける事となる場合があります。寧ろ死なした方が慈悲になるのです。」

「あゝ怖ろしい事だ！私には如何してもさういふ心持は判りません」

「私は安穩の生活、無爲の生活を續けたい。貴方は農民等の自由といふ事を仰有るが、農民等はよし西比利亞に送られて鞭打たれ、頭や背に傷くともその幸福には何の變りもない筈です。私の歎く所は——心の平和とその純潔とを失はるゝといふ點にあるので、頭や背はどうでもよいと思ひます。如何程打たれても頭や背は矢張もとの通りです。」

しかしビエルにはどうも腑に落ちなかつた。

103

其日の午後二人は馬車に乗つてルシャゴウリに出掛けた。ビエルは不幸なアンドレーエを救ふのは自分の務であると思つて、道々共済組合の話をした。聽て河へ来て二人は馬車から渡舟に移つた。アンドレーエは黙つて舷によつて夕日に輝く水を見て居た。ビエルは突然「貴君は來世と云ふ事を御考へになりますか？」と問うた。「有ると思ひます」とアンドレーエは簡單に答へたが其聲は常に似ず顛へて居た。ビエルは「若し神、來世がありとすれば眞理も徳も存在する譯です。人の最幸福は眞理、徳に到達せんとする努力の中に有ります。今日一日は此の土地に住みますが……」と空を指して「永遠に彼處に住まねばなりません。」と云つた。アンドレーエは矢張眼を水面より移さないで聞いて居た。小波の音は「ビエルの云ふ事は本當だ。」と云ふ様に聞え

る。やがて二人は舟を出た。アンドレーエはビエルの今の言葉である。戦争の時以後、始めて沁々と高い空を見た。ビエルとの此の會見は彼の新生涯に入るの時期を劃した。彼の内生活はこれより一變した。

ルシャゴウリに到着すると、老公爵は非常にビエルを歓迎して逗留二日の間極めて親切にもてなした。マリヤは何時も氣むづかしい兄が今日機嫌の善いのは、全くビエルが一緒であるからだと云つて大よろこびであつた。

二十七

ニコライが休暇を了へて聯隊へ歸ると、舊友の士官等は皆その無事な顔を見て非常に喜んだ。ニコライは嬉し涙で言が云へなかつた。彼には聯隊が丁度家庭の様なものである。

親友のデニソフは進軍中脚の上部に敵彈を得て、病院に送られた。

104

ニコライはすぐ病院にデニソフを訪ねたが、何しろ多勢の患者の中とて仲々分^{わか}明^からない。漸く探がし當てゝ會つたが、デニソフは左程嬉しうな様子もなく、何卒^{どうぞ}此を皇帝に奉つてお許を得て呉れと云つて大な状袋を渡した。此は隊へ久しく糧食が渡らないで飢餓に苦しんで居た際歩兵の糧食輸送を認め、部下の騎兵を指揮してそれを奪ひとつた爲め軍法會議に廻されると云ふ噂があるので、それを心配したのである。ニコライは此の請願書を携へてチルジツトへ出掛けて皇帝に奉つたが、皇帝は「法は狂ぐる事が出来ぬ。」とて許さなかつた。

アンドレエーは田舎で二年の間單調な生活を續けた。○九年五月にはロストフ家を訪ねて、伯爵に逢ひ親切に待^{もてな}遇^されて一泊したが、其夜アンドレエーは若々しい小女の語り合ふ聲を耳にした。

「ツンニヤ、まの善い晩ねえ、本當に善い月、出来る事なら飛んで行きたいわ。」などと云つてゐる。此の言葉を聞いてアンドレエーは心に青春の希望^{のぞみ}のむらゝと湧上るを感じた。翌^ある日の歸途、種々の事を思ひ乍ら歩いた。渠の生涯の最大事件——アウステルリッツの高い空、死ぬ時のリザの悲しげな顔、渡舟で聞いたビエルの言葉、それから前夜の月影に聞いた少女の話聲などが連りに心に浮んだ。彼は斯う思つた。「自分は未だ三十一歳だ、自分の世は未だこれからだ。自分の事を知つた丈ちや駄目だ。ビエルの心持や、空へ飛び上りたいと云ふ少女の心持をも知らねばならぬ、自分の爲だけに自分の命を使ひ果してはならぬ……。」

此旅行から歸るとアンドレエーは又思想が一變して、秋にでもなつたら彼得堡へ行きたいと考へた。田舎の生活に飽きて再び軍隊生活が

戀ひしくなつたのである。

10x

其年の九月アンドレーは彼得堡へ着くと直に宮廷へ伺候した。自著「軍法意見」を皇帝に奉る爲であつたが、皇帝に二度も拜謁したが、一言も御言葉が掛からないのでアンドレーは皇帝の自分に對して御不興でゐられる事を知つた。宮内官は其理由をアンドレーが一八〇五年以來軍隊を辭したのにあると説明した。そこで、彼は到底皇帝に直接に奏上した處で駄目だと考へ、父の舊友たる時の陸軍大臣アラキエフ元帥に其意見の貫かれるやうに盡力を請うたところ、元帥は今陸軍々法改正の必要はないと云ふ意味でそれを謝絶したが、名譽職として軍法改正委員に推薦しようと思つた。アンドレーはその任命を待つ間、丁度戦争の前夜の様な不安と一種の好奇心を感じた。アラキエフ元帥と會見した日、彼は伯爵ベツコイの宴會に招かれて侍従武官の

スペランスキーと懇意になつたが、軍法改正委員長マグニツトスキーは此スペランスキーの親友であつたので、紹介して貰ふ事にした。水曜日にはスペランスキーを訪ねて來て長い問話をしたが、二人は互に了解して直ぐに懇意になつた。

一週間餘の後、彼は豫定の通り委員の一人に加へられたのみならず、法律改正委員會の部長に任命された。

二十八

二年以前に彼得堡へ歸つたピエルは、共濟組合の支部長となつて、多くの會員を得た。彼は組合の爲には毫も金を惜まないで、組合は非常に盛になつたが時の經つに連れて、會員中にはピエルの主義に反對する者と賛成する者との二派が生じた。實際ピエルは人類を愛すると云ふ事よりは議論好きな點に於て勝れてゐる——などと組合總裁が或る會

10y

合の終りにビエルを諷刺した事があつたが、それからといふもの、ビエルはまた昔のやうに憂鬱性に陥つて三日ばかりの間は客を謝して室に閉ぢ籠り教義を読み耽つて居た。丁度其時思ひ掛けない妻からの手紙を受取つた。それには何卒逢つて下さいと哀願して而して此頃の悲^{かな}しさ搔き口説き、生涯を捧げて仕へるからなどと書いてあつた。續いて義母からも手紙が来て、彼女の心を察して五分間でも好いから一度會つてやつて呉れと請うた。組合の一員もビエルの妻に對する態度があまり苛酷である事を責め、此教義の上から云つても懺悔した者は當然許す可き筈だと説く者があつた。ビエルは又妻と和解せねばならぬのかと思つて見たが、それを厭とも感じなかつた。何だかすべてが皆自分とは係はりのないものゝ様に思はれる。「誰も善い人はない、誰も悪い人はない。勿論彼女も悪くない。」と考へたものゝ返事を出すでも

なかつた。其夜遅く兎に角バズデエフと相談す可くモスコウへ出掛けた。(バズデエフは其後モスコウに隱者の生活をして居た。)

當時ナポレオン同盟を基礎とした「佛蘭西會」と云ふ社交團體があつた。エレンは夫と和解して彼得堡に住むやうになつてからは其の團體に加盟して有力なる一員となつて居た。佛蘭西の外交官や、朝野の名士からも屢、訪問を受ける。露佛兩帝會見の際もエルフルトに行つて全歐洲の貴顯とも知己になり、社交界に於て非常な成功を得た。

エレンは二年前よりも、更にすつと美しくなつたのだから美人と云ふ評判は至當であるが、あまり怜悧でもないエレンを世間で賢婦人と評判するのにはビエルも聊か驚いた。彼女が交際する青年の中にはボリスもゐたが、エレンのボリスに對する態度には他に對するのとは違ふ所があるのを認めて、折々ビエルは不快に思つた。其頃のビエルの

日記には不安を覺え神に縋らうとする心持が細々と記されてあつた。

二十九

此二年間田舎で暮したがロストフ家の財政はなかく順調に向はず借金は一年毎にふへる一方だ。老伯爵は一つにはそれを補ふ可く何か官職にありつく爲に、一つには娘達を楽しい社交界に出す爲に、彼得堡に出かけた。ロストフ家が彼得堡へ着くと間もなく長女ビエラとベルグの婚約が整つたので老伯爵は又一つ持參金の心配が加はつた。

ボリスは四年振でロストフ家が都へ着くと、すぐに訪ねた。其時ナタシヤは自分の居間に居たがボリスの訪問を聞くと顔を眞赤に染めながらも、いそ／＼として走る様にして客室に出て來た。ボリスはナタシヤの見違へるばかりに生立つたのを見て驚いた。ナタシヤは唯挨拶しただけで母とボリスの話を聞きながら、ボリスを凝視^{みつ}て居る。ボリ

スもつい心をナタシヤの方にとられて屢々話とぎれる。何だか壓迫を感じるので、長く居らずに歸つた。歸つてから彼は思つた。「ナタシヤは昔ながらに美しい。前の様に友達になりたいが、彼女と結婚するのは出世の妨だ、と云つて結婚の考へ無しに交際するのは罪だ。」でこれからはなる丈行くまいと決心はして見るものゝ、二三月たつと訪ねずには居られなくなる。で、訪ねる中に次第にナタシヤに親しくなつて此頃ではエレンの許へはあまり行かぬ様になつた。或夜、眠る前に伯爵夫人はナタシヤを呼んで、ボリスとお前とは到底結婚は出来ないのだから、餘り深く交際せぬ様にと注意し、又ボリスにも餘り來て呉れるなと云つた。

十二月三十一日にカザリン時代の或る一貴族が舞踏會を催し、皇帝も臨御といふので非常な評判だ。ロストフ一家も招かれた。婦人達は

朝から化粧にかゝつて漸く十一時頃支度が出来馬車で出掛けた。非常な盛會であつたが、ロストフ家の人々は餘り厚遇されなかつた。ナタシヤは舞踏の相手の無いのを恨めしく思つて居たが、食事前になつてアンドレーエと組になつて踊つたので、漸く機嫌が直り、今は舞踏場に居る人々が皆懐かしい人に見える。アンドレーエはかのナタシヤが月の夜の少女であつた事を知りロストフ家に泊つた一夜を思ひ出した。

アンドレーエが舞踏會で舊交を温めたロストフ家を訪ねた時は、ナタシヤは平常着の姿で居たが夜會の時の盛装よりも却て其方が似合ふやうに見えた。彼はあの月夜の聲を思出すと、云ひ知れの慕はしさに心が動くのであつたが、食後父にすゝめられて歌うたナタシヤの歌を聞くと更に新らしい悦びが心の中に湧くを感じた。併し其悦びの心の中には何となく泣かまほしい思ひがあつた。ロストフ家から歸つて平常

の時間に寝たが其夜は如何しても寝られない、子供の教育や外國漫遊の事を考へて見たり、「快樂が目の前にあるのに何故此狭い範圍で醒醒と働かねばならないのか。」と考へたりしたが、最後に「ビエルの云つたやうに人は先づ幸福に達する事を知らねばならぬ、死んだ者は死んだ者だ、自分は生きて居る間は樂しまねばならぬ。」と心の中で叫んだ。

三十

アンドレーエは其後も屢、ロストフ家を訪ねて益々ナタシヤと親密になつたが、ナタシヤはアンドレーエと二人丈で居る様な時には、「恐怖」と「期待」とで顔色はすぐ青くなる。アンドレーエも何か云ひたい様な氣がするが打出すだけの勇氣がない。ナタシヤは遂に母に自分の意中を打明けた。アンドレーエもビエルに會つて、ナタシヤを非常に愛して居る、是非結婚したいといふ決心を告げ、更に父の許しを得る爲め

にモスコウを尋ねた。父は此の申出を聞いて大に怒つた。もう老先の短い父には、斯様に變化を求めて測り知らぬ新生涯に入りうとするアンドレーエの心持を解す可くもないので、第一、對手の家柄の低い事、第二、年齢に非常の相違のある事、第三、子供を繼母の手にかけるに忍びぬ事等を理由として不同意を述べたが、若し外國へ一ヶ年漫遊して歸つて来て、まだ雙方の愛が醒めなかつたら其時は結婚してもよいといふ條件を提出したので、アンドレーエはその意見に従ひ一ヶ年結婚を延ばす事に決心した。

ナタシヤは母に打明けた翌日アンドレーエの來るのを待つたが來なかつた、待ちに待つて三週間も待ち暮らしたが來ない。ナタシヤは人々が皆自分の失望を知つて居るかのやうに思はれ、うら耻かしいおもひに閉ぢ籠めて深い悲みに沈んで居たが、今日突然アンドレーエが訪

ねて來た。伯爵夫人は面會して、一家相談の結果を語り、やがてナタシヤを呼び寄せておいて自分は其席を外した。ナタシヤを見るとアンドレーエは下を向いて、「貴女に始めて逢つた時から私は貴女を愛して居ます。貴女は——？」と思切つて云ふと、ナタシヤははいと一言云つたきりで次第に呼吸を忙しくしてとうとう泣き出して了つた。驚いて「どうしましたか？」と尋ねると「はい、餘り嬉しいので」と答へる。アンドレーエの心持は今も以前のやうな憧憬的な詩的な而して神祕的なそれとは違つて、一面かよわきものに對する愛憐の情に似かよつた心持がして、其正直な告白を聞くと嚴肅な義務の念の起るのを覺えた。彼は内約束だけはしても、結婚は一年後に延ばさねばならぬと事をわけて告げたが、彼女には此一年が如何にも苦痛である、「一年、一年なんて、そんな長い間？あゝ怖ろしい！」と叫んで、低い聲

で、「一年も待つのなら死ぬ方がましだわ。」と云つて泣き始めた。が、アンドレーのうれはしげな顔を見ると、漸く涙を収めて、「いゝえ、我儘は云ひません。何事もおつしやる通りに致します、あゝ嬉しい。」其處へ伯爵夫妻が来て二人の婚約を祝した。併し婚約の事は世間へは發表しなかつた。此後もアンドレーは毎日ロストフ家に來たがナタシャとは矢張他人行儀で少しも馴々しくはしなかつた。アンドレーはナタシャに、ピエルには二人の關係を告げて置いた、彼は子供の時から親友で正直な男だから自分の留守中は何事も彼に相談する様にと告げた。

ナタシャは別れる時も泣きはしなかつたけれど、それから數日一室に閉ぢ籠つて、唯時々「どうして私を残してゐらつしやつたんだらう？」と太息をする。が、二週間位経つうちに此の氣病も次第に癒つた。

ポロコンスキー公爵の健康は又此頃衰へて來て、無闇とマリヤに怒りつける。今、マリヤの心を慰むる者は子供と宗教だけである。眞夏のころ、瑞西の兄アンドレーから手紙が來たが、其中にナタシャとは婚約が整うた旨を記してあつた。父に此手紙を見せると烈火の様に怒つて「私の死ぬ迄待てと手紙を遣れ……私もう長くはない……。」と云つた。マリヤは兄へ、父は今怒つて居るが時が経つと和らいで來るであらうと書いて送つた。マリヤは巡禮女の話聞いて非常に感動して、「私は足の續く間一生巡禮をしよう、而して何處で死んでもよい、さうすると、終に悲みも悔ひもない平和な天國へ行けるだらう。」などと考へる事もあつた。

三十一

軍隊生活を續けて居るニコライは兩親からの手紙で、其中にナタシ

ヤとアンドレーの約婚が成立した旨を知つて吃驚した。ニコライは家族の誰よりも好きなナタシヤを家庭から離すのがいやなのだ。兎に角ナタシヤの居る中是非休暇を得て歸らうと思ひながら、機動演習などに妨げられて思ふに任せなかつたが、母親から今の中に歸つて來て財産を整理せぬと、家族の者は路頭に迷ふやうになるかも知れない、父は人が好過ぎて他に欺されて困る、是非一度歸つて呉れとの手紙があつたので、愈、決心して休暇を貰つて歸省した。歸つて見ると両親は非常に年が寄り、ソクニヤは今年二十の女盛り、弟のピチャも見違へる程大きくなつて居る。ナタシヤは戀に悩む少女の様でもなく、樂しさうな快活な様子は昔と些とも變りがない。ニコライはすぐ家政整理に就いて心配し始めた。家政の支配を任せてゐるミテンカに種々と尋ねて見るが薩張要領を得ないので怒り出して、「恩知らず奴、出て行け

！」と追ひ出して了つた。整理書類の中にアン・ナミカルブナの二千留の手形を見出したがビエルは「私はあの親子は嫌ひだ。が、今困窮して居るんだから。」と云つて、それは破り棄て、了つたので、夫人は泣いて喜んだ。斯くニコライは家政の整理に力を盡した。老伯爵は大仕掛でニコライの爲に狩を催した。

秋雨で濡らされた土地へ毎朝霜が降り始める。八月の末には蒼々とした森の樹々も黄金色になり、兎の毛色も次第に變つて、狐は穴へ籠り、狼の子は狗位の大ききになる。狩の好時期だ。ニコライは二三日來馴らして居た犬を率ゐて出掛けた。狩獵好きの老伯爵は、此度はニコライに任せようと思つてゐたが其前日になつて、堪らなくなつて自分も参加する事とした。ニコライは毅然とした様子ですべてを親ら指揮した。一行は騎馬で出掛けた。犬五十三疋勢子六人と云ふ大勢だ。霧

を冒して進んだ一行は、はしなくも犬を率ゐた五六騎に出逢うた。其の先頭に立つた身體の強い、濃い白い口髯のある老人はニコライの遠縁になる小地主であつた。ロストフ家の子供は彼を小父さんリッセルアンケルと呼んで居た。小一行は此の一隊と一緒になつた。途すがら小父さんはニコライの犬を賞めたり、ナタシヤやピチャ等と語つたりした。老伯爵も大へん今日は愉快さうであつた。漸く狩場に来た。ニコライは狼が出て来ればよいと思つたが、半時間も経つても何も出て来ないので、は「私何時も運が悪い、骨牌カルタをしても、戦争をしても、何處へ行つても——。」と考へた。が、漸く一疋の狼を見付けて危く逃げられさうなところを大勢かゝつて生捕つて、はじめて狩獵の愉快を味ふ事が出来た。其後狐狩りをやつた。而して老伯爵は歸つたがニコライ等三人は小父さんに勧めらるゝがまゝに、一夜をミクヘロブエの小父さんの邸で過した。

其の夜、小父さんは非常に三人を歡待して、六絃琴を奏したり、得意の歌を歌うて聞かしたりした。歌は小鳥の鳴く様な面白いものであつた。我を忘れて聞き惚れたナタシヤは、此から豎琴は止めて六絃琴を習ふ事にしようと思つた。午後十時頃邸から迎の馬車が来た。伯爵夫妻が心配して迎へに遣したのだ。三人は暗い濕つぽい夜道を馬車で歸つた。

三十二

伯爵家の經濟は依然としてうまく行かない。ニコライ兄弟は屢々心配さうに密議する兩親を見た。その祖先傳來の立派な家を人手に渡さうとしてゐると世間では評判された。今の閑散な田園生活ですら、食卓は常に二十人以上に圍まれ、其折々の來客も絶えた事なく、宴會狩獵なども前同様の規模で行はれるのだから堪らない。伯爵夫人は財産

家の娘をニコライの嫁に貰つて——と思うて居る。頼みとするのは唯これ丈で、若しニコライがそれを承知せねばもう家産回復の見込はないのだ。夫人は密かに、近頃莫大な兄の遺産を相続したクラギン家の娘ジュリーにあたりをつけて、ニコライに二人の娘も嫁にやらねばならぬから早くお前も嫁を貰つて呉れと涙を流して説き勧め、同時にジュリーを賞めそやして、モスコウのクラギン家へ行つて面白いクリスマスを過してお出でと云つた。ニコライは母の意の有る所を充分知つて居る。母に對つて、「若し私が貧乏人の娘を愛して居るとしたならどうするのですか。金錢の爲めには感情も名譽も犠牲にしると阿母さんは仰有るんですか。」と問ふと、母は、

「いゝえ、さうぢやない、お前には阿母さんの苦勞が分らない。私はね、私は唯お前が幸福でさへあればいゝと思つてゐるのに。」と云つて果は潸然と泣く。

「阿母さん！じや本當の意見を仰有つて下さい。貴方の爲になら私の生涯は犠牲にしても構ひませんから。」

「いゝえ、さういふつもりぢやない。矢張お前は誤解して居るのですもう私は何も何も云ひますまい。」

ニコライはクラギン家に行かなかつた。母は持參金の無いソニヤとニコライとが次第に親しくなるのを見ては苦痛でならないので、何かにつけてつらく當つた。ニコライは休暇の終る迄無爲に滞在した。その頃羅馬なるアンドレーエーからナタシヤに便りがあつて、暖氣の爲に傷痕が疼き出したので來春迄旅行を延ばすとあつた。ナタシヤはアンドレーエーを慕ひ焦がれて居る。四ヶ月目の終には再び強い憂鬱症にかかつて殆んど死ぬかと思はれる位であつた。

ロストフ家は今や悲みに閉ざされて居る。

クリスマスが来た。田舎の事として大法會ハイマスの行はれるのと、隣人や出入の者が挨拶に来るのと、着物を着替へるとの外には何の變つた事もない。併し流石に祝日として、ロストフ家も平常とは違つて賑かに樂しげであつた。ナタシヤも今日は晴々としてソクニヤやビチャと語り興じ、ニコライとも子供の時分の追憶を語り合つたりなどした。それから櫛旅行をしたりして十二夜も樂しく過した。機會がある毎にニコライとソクニヤは益々親しくなつて来る。

十二夜の後間もなく、ニコライは深く愛するソクニヤを是非妻にしたいといふ決心を母に告げた。母は黙つて聞いて居たが、冷かに、お前がさうしたいのなら勝手にするが好いが、斯様な結婚には父も母も同意は出来ないと云つた。母がニコライにこんな態度を見せたのは生

れて始めてだ。母は伯爵を呼んでニコライの前でその申出を父に話し眼に涙を浮べて去つた。父は是非考へを翻して呉れと、頼むやうに云つた。老伯爵は財産を減らしたのは自分の責任だと思ふので餘り強くニコライに云ひ得ないのだ。両親もニコライには其後何も云はなかつたが、母親は二三日してから、ソクニヤを呼んで今迄にない烈しい言葉つきで、「お前故にニコライは害なはれる、お前は恩知らずだ！」と叱り附けた。ソクニヤは俯向うつむいて、黙つてその苦い言葉を聞いて居た。夫人ばかりでなくロストフ家の人々には今迄非常な恩を受けて居るのだから、自分は喜んで犠牲にならねばならぬとは思ふが、何故に急にこのやうな事をいふのかと、夫人の底意を測り兼ねて打ち惑うてゐる。そこでニコライが来てソクニヤを叱らぬやう、而して是非二人の結婚を許して呉れるやうにと頼んだ。母はそれはお前の勝手だが、この様

な恩知らずを娘とは思はぬといふ。ニコライは私にも考があると思ふ。互に争ふ處へナタシヤが顔を眞青にしてとんで来て双方をなだめ、母もソ
ンニヤを苦めぬやう、ニコライも兩親の承諾なしには何事もしないや
うといふ事にして兎に角其場は済ましたが、ニコライは如何してもソ
ンニヤを思ひ切れない。而して快々として日を送つてゐたが、一月の
始めに隊へ歸つたニコライが去るとロストフ家は再び憂鬱に沈んだ。
伯爵夫人は、あの一件から重い病氣に罹り、ソンニヤもニコライと別
れて憂鬱症になつた。伯爵は家政困難で心配して居る。如何してもモ
スコウの邸宅と所有地とを賣らねばならなくなつたが、夫人の病氣の
爲め出掛けられぬので、モスコウ行を延ばして居る。

三十三

アンドレエーとナタシヤが約婚をして後、ピエルは格別の理由もな

いが今迄の生活を續けて行く事が出来なくなつて、再び俱樂部へ出入
し若い青年とまた交際を始めた。今までの修道院的生活からあまりに
烈しい變りやうである。エレンと一緒に暮し度くないので、モスコウ
へ出掛けたが、到る處で歓迎され親切な無邪氣の人として人々から愛
せられて、こゝに安樂な隱家を見出す事が出来た。七年以前を考へる
と何といふ變りやうであらう。或は露國の共和政治を夢み或は哲學者
たらんとし或はナポレオン征伐を空想した青年——それが今は不貞
の女を妻とし、巨萬の富を抱いたところの一退職式部官だ。今は以
前の様に胸に迫る煩悶こそ無けれ、なほ疑問は日に幾千度となく起つ
て来る。併し經驗によつて斯様な問題は永劫解き得可からざる事を知
つてゐる。唯疑問は疑問としてそつとして置いて、僅に酒で苦痛を紛
らして、虚偽の世活を楽しんでゐるのだ。

昨年の初冬からボロコンスキー公爵家はモスコウに移り社會と絶縁して淋しい生活をしてゐる。マリヤには今種々の苦しみがある。今年六歳の甥ニコラシユカの教育を擔當してゐるが、父に似て短氣な彼女はすこしでも小兒が過ちをするとひどく叱りつけ、すぐに其の腕を拉へて隅へ立たして置く、而して自分も涙を出して一緒に泣く。夫れは殆んど残酷と云ひ度い位で、怒るとすぐ手荒な事をする。而して父はブルエンヌをばかり愛して、時々「彼女おれはわしの一番大事な人だ、私の一番の仲善だ。」など云つてマリヤの自負心を傷け彼女を悲しませる。十二月六日は老公爵の命名ネムターなので來訪の客が澤山あつたが、老公爵は誰にも面會せず唯少數の人達を招いて宴を張つた。其中にはビエルもボリスも居た。此頃休暇を得てモスコウに滞在中のボリスは屢々公爵家を訪ねて、老公爵の特別の御氣に入りとなつてゐた。

其の宴會は極めて質素な古風なものであつた。公爵が政治——殊に軍事に關する談話を喜ぶ事は昔と變らない。マリヤは客室に來て何の興味もない談話を聞いて居たが、宴果て、來客も大方歸り、残るのはビエル丈になつた時、ビエルはマリヤに、ボリスが此休暇に彼得堡から歸つて來たのは金持の娘を嫁に貰ふ爲で、彼が今目をつけて居るのは貴女とジュリーとであると語つたが、マリヤは婚期は既に過ぎた身のそんな話を聞くのは寧ろ苦痛である、嫁には行かない決心であると云つた。マリヤは、ナタシヤとアンドレーの婚約が父の氣に入らぬ事を心配して、如何かして、ナタシヤにも逢ひ、兄とナタシヤの間を圓滿にして置きたいと思つてゐる。

ボリスはマリヤの方を望んで居たが、マリヤの決心を知つて、遂にジュリーと結婚して了つた。

ロストフ一家がモスコウに着いたのは一月の末であつた。夫人の病氣は未だ癒らぬが、如何しても回復迄待つ事が出来なかつたのである。モスコウの邸は暖くないしそれに長く居るのでもないので、以前から招待せられて居たマーヤ・アクホロシイモワの家に寄寓する事とした。娘は嫁に行き、子息は官途に就いて、家に残つてゐるのは唯マーヤ一人丈だつたので、ロストフ家の人々が來ると非常に喜んで何くれと親切に世話をして呉れた。マーヤはナタシヤとアンドレーの婚約に就いては既に知つて居た。又ポロコンスキー老公爵(エーの父)の様子などを話し是非一度會ふがよいと云ふので、着いた日の翌日伯爵はナタシヤを伴れてポロコンスキー老公爵を訪ねた。伯爵は心嬉しい中にも何だか恐しい様な心持がした。ナタシヤは勇み喜んで「誰でも私を憎む人

や嫌ふ人はあるまい。私は誰でも大事に思ふ。公爵は阿父さんになるんだし、マリヤは妹となるんだから。」などと思つて居た。公爵家へ着くと先づブルエンヌ、それからマリヤが出て應接したが、ナタシヤは一目見た丈で、マリヤの高慢らしい様子が厭になつた。マリヤも亦ナタシヤの何だか同情の薄さうな様子を見て氣に入らなかつた。老公爵もやがて出て來たがナタシヤを見ると、「貴女には御目に掛かつた事はありません。今貴女に御逢ひする必要もないのぢや。私は今、唯娘に用があつて出て來たのぢやが。」と伯爵をもナタシヤをも見ようとはせず、唯首を伏せてゐる。ナタシヤが如何してよいかと當惑してゐると、今度は頭の先から爪先迄すつと見て、「いや御免下さい。」と云つてそのまゝ出て去つて了つた。伯爵父娘はすぐ立ち去る用意をした。マリヤは此場合ナタシヤに何とか云ふ可き義務があると考へ、伯爵の後から出よう

とするナタシヤをひきとめて「ナタシヤさん一寸お待ち下さい、私は兄の幸福を心から願つて居ますのよ。」と云ふと、ナタシヤは「又後程、御話は承ります。」と強く云ひ切つたが、後は涙で聲が出ない。室を出た時には何を云つたか覚えがなかつた。ナタシヤは歸つてからも目を赤くして泣いて居る。マールヤは何も彼も知つて居るが知らぬ風をして居た。其の晩ロストフ家の人々はマールヤに誘はれて歌劇を見物に行つたが、そこでエレンと逢つて席を共にして見物してゐるうち、ナタシヤは心の痛みをも打忘れて樂しげに語り興じた。エレンの兄アナトールもゐて、ナタシヤに昔馴染の様に打ち解けて語つた。アナトールは話をする間も絶えずナタシヤに眼を注ぎ、其の美しくしさに見惚れて居る様子であつたが、ナタシヤもそれが不思議に嬉しかつた。歸る途すがらもアンドレエーは本當に私を愛して居るのであらうかと疑つて見たり、

アナトールとの今夜の談話や、その顔や動作を思ひ出して見たりなどした。

アナトールは相も變らぬ飲酒家の放蕩者で二年の間ポーランドに駐屯してゐる中、其處の小地主の娘を妻にしたがすぐ見棄て、昔ながらの放縱な生活を續けてゐるのだが、歌劇で見たナタシヤが非常に気に入つたらしく友のドロコフ(彼は再びモスコウに歸つてゐた)に盛んにナタシヤの事を讚め立て、自分は彼女を戀して居ると語つた。

三十五

伯爵はエレンから招かれて、二人の娘を連れて訪ねた。アナトールはナタシヤの獨ひとりの時を見て自分の意中を打開け、私は心から貴女を愛して居る、若し此の戀が叶はねば死ぬより外はないと云つて、返事を聞かして呉れと云つた。ナタシヤは「私には許嫁がある。」と心の中に

繰返しながらも何も云はずに黙つて居た。そこへエレンが来てナタシヤを連れて客室へ歸つた。その晩ナタシヤは眠られなかつた。

翌朝マリヤはナタシヤに田舎へ歸つた方が都合がよからうとの意見を述べた。今、アンドレーエーが歸つて來ても此處で話をしては纏る事も纏らないやうになる。老公爵の傍を離れて相談する方が得策だからといふのである。此日ナタシヤは二通の手紙を受取つた。一はマリヤからで、今一はアナトールからだ。マリヤの手紙には父は年老いて怒り易くなつてゐるが、アンドレーエーの幸福は父の幸福である、誤解は必ず解ける事と思ふ。自分は兄の爲めには何ものをも犠牲にする積りであると述べて、次回の會見の日が聞きたいとあつた。彼女は此の手紙を読んで、アンドレーエーの妻になつた後の事を想像して喜んで見だが、又アナトールの事も忘られない。アナトールのは貴女が私を愛する

か、私が死ぬるか、二つに一つよりないと云ふやうな事から、貴女が承諾しても貴女の御両親は此の結婚に反對であらう。併し貴女とならば世界の果迄も逃げようと云ふ意味を認めてあつた。マーヤは其夜或る宴會にナタシヤをも共に誘つたが彼女は頭痛がするとて家に残つてゐた。夜遅くソンニヤが歸つて來てその室へ行つて見ると、ナタシヤは眠つてゐた。ソンニヤは其傍にある手紙を、何氣なしに読んで見て非常に驚いた。而してナタシヤを低い聲で起した。ナタシヤが眼を覺まして、手紙を読んだかと問ふので、讀んだと答へると、ナタシヤは包む所なく、實はアナトールと戀し合つてゐるのだと云ふ。ソンニヤには、唯二三度しか逢はぬ人に、一年も慕ひ續けたアンドレーエーを思ひ換へるやうな事は有り得るとは信せられなかつたが、ナタシヤは三日の中に今迄の事は何も彼も忘れて、アナトールとは百年も戀をしてゐるや

うであると大膽に告白したので、非常に驚いた。ナタシヤはマリヤに返事を出して、アンドレーエーとの結婚を取消し、何事も皆忘れて呉れと云つてやつた。

伯爵が領地へ歸つた留守の或る日、ナタシヤはひとり自分の室に引込んで何かしきりに用意してゐる様子だ。ソクニヤは前後の事情からナタシヤが驅落する積りである事を悟つた。而して幾日でも寝ずに番をしてゐようと思つて泣き乍ら廊下に立つてゐるのをマリーヤが怪んで其理由を尋ねたので、仕方なしに其の由を告げると、マリーヤは大に驚いて、ソクニヤと共にナタシヤの室へ入つて懇々とその不心得を戒めた。ナタシヤは激しく泣いて「死んで了ふ……。」と聲も切々に云つた。其夜は泣きもせず、寝もせず、失神の體であつた。

翌日伯爵は豫定の通り歸つて來た時、マリーヤはナタシヤが病氣で寢

て居ると告げた。ナタシヤは父に逢うても格別嬉しさうにも無かつた。ピエルはマリーヤから驅落の一件を聞いて非常に驚いた。マリーヤは若しアンドレーエーが歸つて此事を知つたらどんな騒ぎになるかも知れぬ故、今の中にアナトールを此處から去らせるやうに取計らへと云ふ。ピエルは一日方々を探し廻つて、探しあぐねて戻つて來ると、アナトールは自分の家に来てゐたので激しく其の不都合を責めて、翌日すぐ彼得堡に出發させる事とした。ピエルがマリーヤに、其次第を告げに行くと、マリーヤは昨夜ナタシヤが、多量の砒素を飲んで自殺を圖つたがソクニヤが知つてすぐ手當をしたから命には別狀がないといふ事を語つて、しかしこれは祕密にして置いて呉れと云つた。

ポロコンスキー公爵はブルエンヌから町の噂を聞いてはマリヤへ遣したナタシヤの手紙に思ひ當る事があつた。老公爵は非常にアンドレ

エーの歸りを待つて居た。ビエルがアンドレエーが歸つたとの報に接したのはアナートルが出發してから五六日後の事であつた。逢つて見ると、アンドレエーは非常に變はつて居る、ナタシヤの一件も既に知つて居たが、豫想した程には驚いて居らぬ。併し流石に怒は解けぬと見えて、「墮落した女は許してやると云ふのが私の持論で有つたが、此場合どうしても私には許せない！」と鋭い聲で云つた。老公爵は非常な元氣だ。マリヤは兄の悲みには同情してゐるが破約は寧ろ喜んで居る様である。

ビエルは其夜ロストフ家を訪ねてナタシヤに逢つた。而して彼女の煩悶に同情して深く慰めた。

其夜は寒い冴えた夜であつた。世界終焉の前兆かと世の人々をおびやかす彗星は長く／＼尾を引いて居た。ビエルにはそれが新しい生涯

に入らうとする愛と慈悲とに充ちた自分の魂のやうにも思はれた。

三十六

一八一一年の末に西歐羅巴に於て召集された大軍は、翌十二年、東に向つて露西亞の國境へ押寄せた。

六月二十四日、始めて戦が露西亞の境上に起つた。人間の理性と天性とに反する一大事件が起つた。

其の原因は何にあるか。ナポレオンは英吉利の陰謀にありとし、英吉利議會はナポレオンの野心にありとし、マルデンブルグ侯は自分に受けた侮辱にありとし、商業家は「大陸同盟」にありとする。併し基督教信者の數百萬人が單にナポレオンの野心の爲に、又アレキサンダア帝の決意の爲に況んや一侯爵の受けたる侮辱の爲に互に斯く相殺傷し相掠奪するのであるとは、歴史家ならぬ吾等にはどうも考へる事が出

トリス、精神は名もなきに存するを
來ないのである。

今若し佛軍の一兵卒が進軍の命を拒み、第二、第三と順次全兵卒が進軍の命を拒んだら戦争は出来ないであらう。露國に専制政治がなかつたならば、英吉利に陰謀が無かつたならば、アルデンブルグ侯が生れなかつたなら、更に佛蘭西革命が起らなかつたなら、——それでもなほ此の戦争は起つたであらうか。要するに戦争の責任は共同である。

歴史に於ても宿命は避けられぬ、歴史上の現象を理論によつてのみ説明しようとすれば益々不條理になる計りである。

人は二重の生活をする。一面に於て個性を尊重し、自由を愛するけれど、他の一面では蜂が群をなして生活するやうに社會の一要素として生活する。故に人は自意的には自己の爲の生活をするか、一面歴史的社會的の目的に到達する爲に機械として働く。歴史的現象の往々理

解する事の出來ぬのはこれが爲である。

露國皇帝はビルノーに一ヶ月以上滞在して居た。戦争の避く可からざるは明らかで、皇帝も此の爲に彼得堡を出發せられたのだが、未だ何等戦争の用意も無い。今の中は唯面白く暮らしたいと云ふのが、武官等の希望で、舞踏だの宴會だのが引きも切らず催された。ナポレオンがニーメン河を渡つてコサツク兵を撃退し、佛軍が始めて露國の土地に足跡を印した日には、アレキサンダ帝は伯爵ベニグセンの別業で催された舞踏會に臨んで居られた。此の會にはエレンも出席して、ポリスと組んで踊つた。ポリスは一瞬時も皇帝から目を離さずに見て居た。皇帝は舞踏には加はらず、戸口に立つて誰彼と話をして居られる處へ、侍従武官バラシヨフが進みよつて何事か奏上すると皇帝の顔には驚き

の色が浮んだ。而して皇帝はバラシヨフの腕を取つて舞踏室を出て庭へ降りた。ボリスも庭へ出て見た。皇帝は怒りを顔に現はして「宣戦布告もせずに兵を送るとは？予は敵の一卒たりとも我が領土にある限り和睦はせぬぞ。」と言はれた。ボリスは始めて佛軍の侵入を知つた。六月廿三日午前二時、皇帝はバラシヨフを呼んで直接ナポレオンに渡す可き親書を交附し「敵一卒たりともわが國內にある間は斷じて和睦はせぬと申傳へよ。」と命せられた。

三十七

バラシヨフは同夜直に出發して佛軍の本營に達したが、ナポレオンに會見する事を許されず營中に拘留されて不愉快な日を送る中、四月の末、既に佛軍の手に歸したビルノーへ移され、そこでナポレオンと會見する事となつた。

王宮の莊嚴に馴れたバラシヨフもナポレオンの豪奢には驚かされた。大きな客間へ通されて暫く待つてゐると、侍従が来て、曾て露帝が彼にその命令を與へた室に案内する。二分も待たぬ中に扉を開いて重い足音が聞える。頭を高く上げて入つて來た。これがナポレオンである。渠は白い胴着の上へ青い軍服を着、白い羚羊の皮の筒袴を短い脚の股へ確かりと着けて長靴をはいて居る。頬の隆い、肥えた若々しい顔には何處かに寛大の相がある。バラシヨフが丁寧に頭を下げたのに對し一寸首肯してその側へ進みより、時間を惜む人の様に直ちに要點について話す。貴下の持參せられた帝の親書は確かに受取りました。」と大きな目でバラシヨフを見詰める。バラシヨフは目を逸らす。「私は戦争は望みません。止むを得ず斯うなつたのです。併し、今でも。」と、此「今でも」といふ語に力を入れて、「貴下のお申出は聞かう

一四四
と思つて居ます。」と云つて露國政府に對する佛蘭西の不滿の理由を述べた。その物柔かな言葉を聞いてはバラシヨフはナポレオンの平和を望み、條約によつて局を結ばうと欲する事は明かであると思つた。でナポレオンの云ふ間に自分の云ふ可き事を考へて置いて、さて云はうとしたか其眼を見るとどうも思ふやうに云へない。思ひ切つて「アレキサンダア帝は平和を望まれます。けれど或る條件の下にでなくては條約を結ぶ事は出来ません。」と迄云つて、「一兵たりとも我國內に止る間は……。」と云ふ言葉を思出したが、此言葉は不思議に口に上す事が出来なかつたので。暫く躊躇して、「佛兵がニーメン河より退却すると云ふ條件でなければ。」と云つた。ナポレオンはこれを聞くと顔が痙攣して、左足の腓が烈しく顫ひ始めたが、其位置を動かさず、高い調子で前より早口に語る。その間バラシヨフは聲を出すにつれて烈しさを増

して來るその左足の痙攣を、無意識に見て居る。

「余とても平和を欲する心は敢てアレキサンダア帝に劣るものではない。が、それは別として談判開始の前に貴國の要求するところは何でありますか。」

「ニーメン河より陛下の軍隊の退却する事で御座います。」

「ニーメン河から退却？唯其丈？唯ニーメン河からの退却？」と、眞向から見詰めたが、急に向き直つて室を歩みながら、「二ヶ月以前にもヲーデル河からの退却を要求したではないか、今更またそんな事を——。」と黙つて室の隅から隅へ歩いて行つて、バラシヨフの前へ來て止まつた。左足は前よりも強く顫えて居る。「余には出来ぬ！」と叫ぶやうに高い聲で云つて、「モスコウと彼得堡を與へるといふならば其の條件を肯きましょう。……戦争を始めたのはアレキサンダア帝で、余

ではない！」と、相手には一言も云はせず、「貴國が英吉利との同盟の目的は何であるか……。」と叱るやうに云つた。而して頻りに佛軍の優勢を説く。バラシヨフは不愉快であり不安でもある。彼はナポレオンの視線を避けつゝ、露國が有力な軍隊を有する國を同盟國として有するを説いた。ナポレオンは彼の傍へ寄つて来て、「分かつた、もし貴國が普魯西を使喚して我軍を牽制しようといふのなら余は普魯西を歐洲の地圖より抹殺する！」と顔を眞青まっさかにして、白い手を強く打ち合した。バラシヨフは返答の言葉を知らなかつた。ナポレオンは「余はよく、アレキサンダア帝を知つてゐる、帝の崇高な精神は余の賞讃措く能はざる所だ。」と静かに云つて室を出て去つた。

バラシヨフはあの怒り様では再び會ふ事も出来まいと思つてゐたが、數刻の後、ナポレオンは食を共にしたいと云つて出て來た。而し

て、バラシヨフを自分の傍へ坐らして打緩ゆるいで話しかけた。「モスコウの住民は幾萬か。」とか「寺院は幾つあるか。」とか「家屋は幾何か。」とか夫から夫へと巧みに問ひかける。バラシヨフは暗に佛軍の近頃西班牙に敗れた事を諷して、「露西亞には寺院、會堂の數は西班牙程御座います。」と答へた。ナポレオンはなほ露國の事情を種々と問うて後、バラシヨフの耳を一寸引いて唇に笑を浮べた。佛國の宮廷に於ては皇帝に耳を引かれるのは最大名譽としてあるのである。

三十八

アンドレエーはピエルと會つて後、用事があると云つて彼得堡へ出掛けた。實はアナトールを探し出して決闘するつもりなのだ。併しアナトールは長く其地に止まつてゐなかつた。ピエルが、アンドレエーが探しに行く旨を告げたので、アナトールは陸軍大臣に乞うて他の地方

へ轉勤したからである。

二四

アンドレエーは彼得堡滞在中、クツヅフ伯爵に出逢ひ、その世話によつて參謀官の一人に加へられ土耳其に出發したが、途中で厭になつて西軍に轉隊させて貰つた。轉隊の前、ルシヤゴウリに父を訪ねて久振りで家族と卓を共にした、父が矢張マリヤに辛く當るのを見て、食後父に、マリヤは決して非難す可き女でない、マリヤを非難するのは皆貴父の誤解から來るので、其原因は卑しい佛蘭西婦人に有ると注意すると父は大に怒つて、飛び上つて叫んだ。「出て行け！二度と歸へるな！」

アンドレエーは直に出發しようとしたがマリヤにひきとめられて一日延ばした。翌日子供の部屋へ行つて子供と遊んで見たが如何しても父子の愛情が起らない、これが彼には苦痛であつた。彼が愈々淋しい家庭より離れようと思ひ定めて、出發の用意をするのを見てマリヤに是非父と和解してから出發して下さいと乞うたが、彼は聞き入れずに出掛けた。「神様があとで屹度貴方に悲しみをお與へなさいますよ。」とは別れの時にマリヤが云つた最後の言葉である。

アンドレエーは七月の一日に大本營に着いた。皇帝の親ら率ゆる第一師團はドレサの城壘に據つてゐた。アンドレエーは種々の人と交際して思想がまた變つてゐた。皇帝から何處に勤務したいかと問はれた時も其のお側に仕へる事を願はず、實務に携はりたいと請うた。

ロストフは開戦の始めにニコライの受取つた兩親からの手紙には、ナタシヤの病氣及びアンドレエーとの婚約の取消などを知らして、其末に軍隊を退いて歸つて來て呉れと書いてあつた。しかし、ニコライには休暇を貰ふとも退職して歸るとも、何れにも決心が附かなかつた。

二五

たゞ簡單に返事を出した。而して別にソンニヤにも手紙を出して愛情の昔に變らぬことを告げた。ニコライは肌合が軍人にふさはしかつたので、昇進も早く、此時は既に騎兵大尉となつて、前に屬してゐた中隊を指揮してゐた。戦争が始まると此聯隊は轉々してビルノーに引き上げ、更に退却を續けてドレサ迄來て止まつた。

或夜、ニコライが士官等と宿舍に集まつて徹夜笑つたり、語つたりしてゐると、朝の三時にロストロブノ迄進軍せよといふ命令が下つたので、直に自分の隊に歸つた。もう夜は明け離れ夜來の雨も止み、雲も散つて居た。

半時間も経たぬ中に中隊を整頓し、歩兵、砲兵に續いて樺の並木道を進んだ。ニコライは今全く戦にも馴れて大砲の音にも音楽を聞くやうな快感を感じる。又、其音で略ぼ敵との距離を測り知る丈の經驗

をも得た。戦鬨にして、味方優勢と見るやニコライはその一中隊を提げて勇敢に敵の龍騎兵を追撃し、若い士官を捕虜とした。而して此殊功によつて勳章を與へられ、勇名を全軍に輝かしたが、其後、昇進して一箇大隊を指揮する事になつた。

ロストフ伯爵夫人はナタシヤが病氣と聞いて自分の病氣の未だ癒らぬのにピチャ其他を連れてモスコウに出發した。此時、ロストフ家はマーヤの邸を引き拂つて既に自邸に移つてゐた。

ナタシヤの病氣は重かつた、食も進まず夜も眠れず、醫藥の力も及ばないので、唯靜養の外はなかつた。幸に幾分か快方に向つたけれど前のやうに、夜會や音樂會へ出席する事もせず、何とはなしに憂に沈んで訪ふ事も訪はれる事も、厭だつたが、唯ビエルに丈は喜んで逢うた。而してビエルの同情ある言葉が沁々と嬉しくビエルに逢ふのを何

より楽しみにして居たが、流石に未だ戀には落ちなかつた。ピエルは既に妻のある人で、二人の間には道德の柵のある事を知つて居る。

眞夏の斷食祭の折、近所の人達が立ち寄つて、ナタシヤを禮拜に誘つたので、彼女は喜んで一緒に行き、熱心に祈を捧げて今迄の行を自ら責め、一心に神に絶つて、幸福な新生涯に入らん事を誓うた。かくて心も次第に落ちついて、目に見えて健康になつて行つた。

三十九

七月の初旬、憂ふ可き流言がモスコウ全市に擴つた。それは皇帝が人民に訴へる可く、モスコウに臨幸あるといふ噂であつた。皇帝の宣言書がモスコウに着いたのは七月二十三日であつた。其日は日曜であつた。

ロストフ家の人々はいつものやうに馬車で寺院へ行つた。ナタシヤ

は祈禱する中にも思ひ出で、は悔いることのみ多い。「何事も神の御旨のまゝに任します、もう何の希望もありません、唯神の御意に叶ひますやうに。」と只管に念ずる様子を、伯爵夫人は勤行の時の娘の感動した顔や、輝く眼に見てとつた。

此日僧侶は外敵調伏の祈禱をした。

ピエルはひそかにカタシヤを捨て難く思つてゐる。彼は矢張酒も澤山飲んで、相變らず放縱な生活を續けて居る。彼は共済組合の一員からナポレオンの運命に就いて豫言を聞いた。それは斯うだ。黙示録の第十三章第十八節に「獸の數を數へよ。其數は六百六十六なり。」とあり同章の五節に「大言と瀆神とによりて四十二箇月其勢力を保つものなり。」とある。今、佛語の字母順によつて第一番目から十番目迄を一つ違ひに、其の後を十違ひにして佛蘭西語でナポレオン皇帝と綴つて當

嵌めて見ると丁度六百六十六になる、だからナポレオンの年齢の四十二に當る一八二二年が彼の勢力の絶頂である事が分ると云ふのだ。ピエルは之を聞いて自分の名を種々に綴り直して見ると、矢張六百六十六になつた。世の青年等は皆軍隊に入る事を希望するが彼は少しもそれを望まなかつた、といふのは、渠が共済組合の一員である事乃至表面丈の愛國心を滑稽視して居るのにもよるが其の主因は自分の數が六百六十六になるからであつた。

今日の日曜も例のやうにピエルはロストフ家へ呼ばれた。タナシヤの歌ふ聲を聞くと非常に心が樂まされる。ナタシヤは歡び迎へて、「今日は本當に嬉しう御座います。」と云ふ。話の間にナタシヤはアンドレーが軍隊に入つたと云ふが本當かと聞いて「彼人（常にナタシヤはアンドレーを三人稱で云ふ）は矢張私を怨んで居るでせうか。」などと尋ねる。ピエルは、怒は解け

ぬと思ひます。けれど私が若しアンドレーであつたならば……。」と云つたが以前慰めに來た時の事など思ひ出して可哀相になる。ナタシヤは直ぐ「貴君、貴君は別で御座います、私は貴君より親切な氣高い人は存じません、貴君があの時……今でも……無かつたならば私はまあ如何なつたでせう。」と眼に涙を浮べた。

此時ピチャは客室から出て來た。ピチャは大學入學の準備中で騎兵になりたいと云つて騒いで居る、ピチャはピエルに皇帝の宣言書を持つて來たかと尋ねる。ピエルは持つて來たつもりで衣囊を探して見たが落したと見えて見當らない。ソンニヤが拾つて持つてゐたので、それを渡すとピチャは直に讀んで呉れと云ふ。伯爵も夫人も其處へ來て食後に讀んで貰ふ事に決める。宣言書を聞くと、ピチャは「私は決心しました。如何しても從軍します！」と叫ぶ。伯爵は夫人の心配さうな顔

附を見て、「立派な兵士になれる。併し今の中は勉強して居れ！」と諭す。ピチャは「勉強つて——？國が危急に瀕して居る時に……。」と額を汗に滲まして熱心に従軍したいといふと、夫人は驚いて顔を眞青にして此の最愛の末子を見る。伯爵は「唯、馬鹿な事を云ふな……黙れ！」と叱りつける。ピエルは何と云つて善いか分らず、今夜は用があるからと云つて歸つた。ナタシヤの事が思はれて涙が出た。而して再びロストフ家を訪問すまいと決心した。

皇帝はその翌日到着せられた。ロストフ家の農僕は許を得て、皇帝を拜む可く、ピチャと共にクレムルに行つたが、非常な雑踏で押され揉まれて酷い目にあつた、皇帝は寺院で祈禱がすむと王宮に還幸、食後ビスケットを露臺から撤き散らす。群集は我れ勝ちにとそれを拾ふ、ピチャも危険を犯して漸くその一個を拾ひ得て大喜びである。歸ると軍隊

へ入る事が出来ねば何處かへ逃げて仕舞ふと云ひ張るので、父も仕方なしに許した。

ピエルは皇帝の貴族商業家に話された話を聞いて、皇帝の爲なら何物をも犠牲にすると思つた。

四十

アンドレーエーの出發した翌日、公爵ニコライはマリヤを呼んで「お前は俺とアンドレーエーとを喧嘩させて、それで満足か。私には苦痛をさせて、それでお前は満足か？」と云つた。其後一週間マリヤは父の部屋へ行かなかつた。父も病氣で部屋から出てこなかつた。やがて又熱心に仕事を始めたがマリヤへは甚だ冷淡だ。

八月の始めにアンドレーエーから第二回の手紙が來て、是非許して下さい。以前の様に愛して下さいと父に請うて來た。父は非常に慈愛の

籠つた返事を出した。

一五

ルシヤゴウリの老公爵の領地はスモレンスクからもモスコウからも餘り遠くない、スモレンスクの知事に本當の戦争の様子を知らして呉れと老公爵が問ひ合はせた。知事は、「唯命令によつて働いて居るのだから何も存せぬが、兎に角自分の考へでは老公爵が如何にお弱りになつてゐるにせよ、モスコウへ移らるゝ方がよいと思ふ。」との返事を其使に傳へた。スモレンスクの町は頻りに砲弾に見舞はれ、砲火に家屋を焼かれて炎焔物すさまじく、女子供の泣き叫ぶ聲、誠に慘憺たる姿である。そこで不圖使はアンドレーに逢つた。アンドレーは取急いで二三行ほど敵は必ず一週間以内にルシヤゴウリを占領するだらう、早くモスコウへ立ち退く様に。」と記してマリヤに傳へる可く頼んだ。その使が歸ると老公爵は奮然として起つた。而して農奴を以て國民

軍を組織し、最後迄ルシヤゴウリに残りたいと總督へ告げた。マリヤ其他の家族は先づボグチャロポへ落ち其處からモスコウへ行くやうにと命じたが、マリヤは父を残しては行けぬと云つて聞かない。父は非常に怒つて、もうお前とは口もきかぬ、顔も見ぬと云つたが、心の底ではその健氣な志を嬉しいと思つた。ニコラシユカ等の出發した翌日老公爵は大禮服を着、勳章の總てをつけて、總督を訪問する前、先づ國民軍を檢閲すべく公園の方へ出掛けたが、俄かに卒倒したといふので、國民軍の兵士や農奴に連れられて歸つて來た。マリヤは大に驚いて走りよつて見ると、顔色がまるで變つて先刻の雄々しい様子は消えて弱々しくなつてゐた。マリヤを見て連りに唇を動かすが、言葉は少しも分らない。醫者は右半身が中風に罹つて居ると診察した。その中にルシヤゴウリは益々危険になつたので、翌日ボグチャロポに移つた。

一五

其時はニコラシユカの一團は既にモスコウに出發してゐた。老公爵は三週間も同じ容體で唯何か云はうと悶えて居る、マリヤは彼女にとつて唯一の慰藉である祈禱も出來ず、餘りの悲みに涙も出ない有様だ。醫者からも又役人からも早くたちのく様にとすゝめられて、マリヤは二十七日に出發する事とし、用意に忙殺されてゐる。其の前夜父は常になく苦しさうであつた。彼女は父との永遠の別を考へて、曾つて知らぬ悲しみを味うた。父と別れて後は如何したらよいだらうなど考へ乍ら曉方父が少し静まつたのを見て眠つた。翌朝醫者に呼ばれて病室へ行つて見ると、病人は激しく顔を震はして手を上げ、眉と唇を氣むづかしげに動して幾度かわからぬ言葉を繰返してゐた。頭を振つて何事か云はうとして、此度は明らかに、「難有う。許して呉れ……。」と云つてアンドレエシヤを呼べと云ふ。マリヤは唯「はい手紙が參りました。」

と答へると、驚いた風をして「何處に居るか？」と問ふ。「スモレンスクで從軍して居ります。」と答へると目を閉ちて左様だつた、思出したと云ふ風に首肯て見せて、「露國は亡びる、皆が亡ぼすのだ！」斯う云つて涙が頬を轉び落ちる。醫者はマリヤの悲みを見兼ね、出發の時が迫つたからと云つて、その用意にマリヤを出してやつたあとで最後の著作があつた。マリヤが來た時には既に平和な死を遂げてゐた。

マリヤは如何しても父が死んだとは思へないのである。

四十一

マリヤが父の葬式を済ました後、ブルエンヌが歸つて來て、佛蘭西の將軍レモアの保護を受けるがよからう、今避難しても途中でどんな危険に遭ふかも知れないからと勧めた。併しアンドレーエが、若し妹が佛蘭西の保護を受けたと云ふ事を知つたら何と云ふであらう！又世

人がニコライ公爵の娘がレモール將軍に助を乞うたと云ふ事が知つたら何と云ふであらう！マリヤは今迄になく激しく怒つて、斷然その言葉を斥けた。

主を失うたので、今迄善く働いたドロコンの如きすら俄かに不忠實になつて、マリヤが兄の名義で農奴に穀物を分配するやうにと吩咐けると、突然に「お暇を下さい！、私は二十四年間も此家に奉公してゐますが、不正な事は少しもしません。」などとひねくれて出る。彼にも、又農奴等にも、今迄常に出来る丈の事はしてやつてゐたのに、なせこんな態度を示すのか。そこへ他の監督が来て農奴等が集まつて来て穀物倉の事について命令を待つて居る旨を告げる。農奴等呼び集めよとは命せぬ、唯穀物を分配してやる様にと云つたのだにとドロコンを詰るが、一向に要領を得ない。止むを得ずマリヤは父や兄の代理として

衆の前に立つた。「戦争で荒されたのは一般の不幸であつて、自分の力では如何する事も出来ない。自分も今立ち去らうとしてゐる。お前達も此穀物を分配して各々避難する様に。」と諭したが服しない。「いやだ！」とか、「あんた、獨りで御出なさるがいゝ。」とか云ふ聲が群集の中から聞える。マリヤは「何故さうわからないのか。何故此處を去るのが厭なのだらう？、家も新築して上げるし、又扶持しても上げようといふのに。」といろ／＼にいひきかしても飽迄頑固に、「いや穀物なんか入りません。」「たとへ敵に殺されても此處は離れません。」と云ひはつて動かない。マリヤは力及ばず、其儘家に歸り、翌日出發の馬車を準備して置く様にと命じて、自分の部屋に入つて、ひとり考へに耽つてゐた。

ボグチャロボは此三日と云ふものは露佛兩軍の間に挟まれて危険に瀕して居る。そこへニコライが敵の機先を制す可くやつて來た。來て

見ると、ポロコンスキー公爵家の娘が、唯一人で農奴の我儘に苦しめられてゐるといふので急いで其邸を尋ねた。

疲勞と驚愕とで錯亂して居るマリヤはニコライと逢うても誰であるか、何故来たのかさへ判らない、其顔を見、其言葉を聞いてやうやくその露西亞人である事を知つたほどであつた。マリヤははげしく激してゐて、震へ聲の言葉もきれ／＼であつた。ニコライは此旅行の傳奇的なものであつた事を考へる。「悲嘆に暮るゝかよわい婦人が亂暴な農奴の一揆に苦しめられて居る所へ偶然來合す——不思議な縁といふものだ。」などゝ話を聞きながら思つた。マリヤの語る一伍一什にニコライも涙を浮べて、「私が此處へ來合せましたからは、私の力の及ぶ事は何でも致しませう。私が護衛致しますから一刻も早く御出發なさるがよい。」と云つたのでマリヤは非常に喜んで直に出發の用意をする。ニコ

ライはいたく此の不信不義な農奴を懲らして置いて、騎馬でマリヤの馬車に添うてヤンコボまで送り届けて丁寧わかたに別を告げた。マリヤは「若し彼人が來合せなかつたならば、如何なる事でも有つたか。」とその崇高な人格を想ひやり、又同情の涙に輝いたその親切な、正直な眼附を思浮べて、別れて後の淋しさに涙をさへ落した。モスコウへの道すがらも「若し此の戀が叶うたら……」などと考へて見ては、唯一目見ただけの人に戀したと云ふ事が我と我身に耻ぢらるゝ。が、此思ひを知るものは何人もないと思つてほつと安心する。此後も時々ニコライの親切を思出しては獨りほゝ笑む事もあつたが、これも皆神の攝理であると、マリヤには考へられた。

ニコライもマリヤを懐かしく思つた。財産家の娘だから彼女と結婚したら母も喜ぶだらうとも考へる。併し、ソンニヤの事も思はないで

はない。

一六

四十二

アンドレーエーがクツゾフ元帥に呼ばれて本營に行つて見ると、元帥は機嫌よく迎へて、父の安否を尋ねた。昨日死去の報があつたと話すと「あゝ、遂に天國に行かれたか、何事も神の御意ぢや。」と溜息を吐いて暫らく黙然として居たが、「惜しいことをしました。御愁傷御察し申しますぢや。」と慰めた後、自分の部屋に誘うて、いろ／＼と話をす。アンドレーエーは參謀官にでもなれと云ふのかと思つて、「私は聯隊にも馴れて参りました士官にも多くの知己が出来ました。今聯隊を離れるのは残念であります。」と豫防線を張る。「君は私には無くてはならん人ではあるが、それも尤もぢや。」と云つてアウステルリッツの戦争の話などした。

皇帝が出發して後は、モスコウの生活も常態に復し、露國が今眞の危険に瀕して居るとは思へないほどあるが、併し風雲は益々急だ。英吉利俱樂部員は如何なる犠牲をも辭せずと深く決心して居る。今もモスコウにゐるビエルは、「軍隊に入らうか」と考へても見る。日一日と危険が迫るにつれて人々は續々と避難し、モスコウに今残つて居るのはロストフ家だけであつた。九月五日遂にビエルもモスコウを去つて翌朝モゼエースクに着いた。此處は家毎に兵士が泊つて居て、町の内外到る處軍隊で充たされてゐる。ビエルは今何の爲と云ふ理由はなく唯犠牲になると云ふ事に、新しい喜ばしい心持が味はれた。

其前日にはセバディノの戦があり、其翌日即ち、七日には有名なポロデイノの戦があつた。

此朝ビエルはモゼエースクを出發しゴルキー迄馬車を驅つて山を上

二六

り村の細道に出て、始めて農夫の國民軍を見た。彼等は皆帽子の上に十字をつけ、白い襯衣を着て一生懸命に働いて居た。ビエルはモゼエースクで見た負傷兵の事などを思合して、我國の危機に瀕して居る事を今更のやうに痛切に感じた。馬車を降りて、其國民兵等の間を過つてその城壁へ上つて見渡すと、戰場は一瞬の中に展開される。スモレンスク街道も見える、白い教會堂のある村も見える——此がポロダイノーだ。ナポレオンの本營らしい處もありくと指呼される。そこで思ひ掛けなくもボリスに逢つて、アンドレーの聯隊を問ふと今連れて來て上げませうと親切に云ふ。そこへ多くの士官等が來て、ビエルにモスコウの様子を尋ねたり、戦争の状況を説明したりする。總司令官クツゾフもビエルを見て此處へ呼べと副官に命じた。クツゾフの前には一人の兵士が立つてゐた。此はドロコフであつた、彼は勇

敢ではあるが、何分品行が悪いので又々剝官されたのであつた。

ビエルはベッコフを見ると帽子を取つて丁寧に敬禮した。ドロコフは頻りに命を捨て、國の爲めに盡したい、如何な危険な事でも命じて呉れと請ふとクツゾフは一々感心して聞いて居る。そこへボリスが來てビエルに國民軍の事を話して居ると、クツゾフが横合から國民軍が如何したかと問を入れる。ボリスが、「はい、彼等は皆白い襯衣を着て死の用意をして居ります。」と答へる。クツゾフは、「あゝ立派な奴等ぢや！」と目を閉ぢて頭を揮つて、「見上げた人民じや！」と溜息と共に繰返したが、ビエルに「貴君は火薬の匂はお厭ですか、よい匂ですぞ。」と云つた。ビエルがそこを辭して出ると、ドロコフは側へ寄つて來て、人の居るのにも構はず、「伯爵、此處で御目にかゝれたのは嬉しう御座います。誤解からあんな事になつたのは残念です、何卒許して下

さい。」と丁寧に云ふ。ビエルは何と答へてよいか判らない。唯笑つて見て居る計りである。ドロコフは目に涙を浮べてビエルに接吻した。ボリスが、ビエルの希望をベニグセン將軍に告げると、將軍は直にビエルを共に戦列に加はらせる事とした。ベニグセンは參謀を連れビエルをも引連れて、戦闘状態を視察すべく出發した。ビエルには始めての經驗であつた。

四十三

九月六日の午後、アンドレエーは或る村の荒れ果てた牛小屋の中に横たはり、壁の破から、下枝の折れた樺の並木や、小麥の穂の散らばつて居る畑や、露營から上る煙などを眺めてゐた。

七年以前アウステルツツの戦の前夜に感じたと同じ様な不安の感じがする。もう明日の戦争の命令も與へて今は何も用もない身の、斯う

して様々に思ひ耽つて居ると今迄の生涯が幻燈の様に一々あり／＼と思ひ浮べられる。當面の三つの大きな悲哀——破れた戀と、父の死と佛蘭西の侵略と。戀！不思議な運命で與へられた少女！自分は愛と幸福とに充ちた詩の様な夢をみて居たのに……あゝ厭な怖ろしい事だ！——父はルシヤゴウリを建設して、平和な餘生を送らうとしてゐたのにナポレオンにすべてを蹂躪されて了つた。その命までも——あゝ父はもう此世にゐない、永劫逢ふ機會はない。——祖國！モスコウの破壊！——併し明日は我が身も殺されるだらう。

彼は夕日に輝く樺並木の、黄や青や白の幹をじつと凝視めつゝ、明日は死ぬに違ひない。死は總ての終だ！などと考へて居るうちに、士官等が集まつて來た。其中にはビエルも居た。アンドレエーを見ると「私に見物に來ました、面白いものですね。」と云ふ。アンドレエーは

皮肉に、「共済組合の人達の戦争に就いての意見はどうですか。」と問ふと、ピエルは眞面目に、「貴方はモスコウが今如何な状態にあるかを御存じないと見える。」と答へる。種々の話の後にアンドレーエーは「明日の戦争の勝敗は別として、一人も我兵は捕虜にはさせぬ積りだ！佛蘭西軍は我等の家庭を破壊し、モスコウを滅さうとしてゐる。憎む可き敵！いや人道の罪人！」といきまいた。ピエルも此には同意した。アンドレーエーは尙ほ語を續いで、「戦争は戦争だ、遊戯としてはならぬ、怠惰漢の消閑具にしちやならぬ。」と云つて、もう寝る時だから歸れとピエルを促した。最早暗いのでアンドレーエーは怒つて居るかどうか、其顔附は分らないが、ピエルにはどうもこれが最後の會見である様に思はれた。で、悲しい心持を抱いてゴルキーに歸つた。

アンドレーエーは其夜どうしても眠られなかつた。ナタシヤの事、二

人の戀の破れた原因などがしきりに考へられる。「自分は明日は死ぬかも知れない、併し彼女は尙ほやはり生きてゐて楽しく此世を過してゆくのだ。」

九月六日ポロディノの戦の前日、巴里宮廷の宮内官はブルエポの陣營にナポレオンを訪ねて、皇后からの贈物を奉呈した。これはナポレオンと煥帝の娘との間に生れた羅馬王と呼ばれてゐる男兒の肖像畫であつた。ナポレオンは非常に喜んで、「嗚呼立派だ！」と賞めては、眼に喜びの涙をすら浮べて、側へ置いて見たり、前へ置いて見たりした。聽て天幕の前へ高く掲げて兵士等にも見せた。

四十四

ポロディノの戦争に就いて、歴史家は佛軍の敗因を其日ナポレオ

ンが頭痛がしてゐたといふ事に歸して、若し此の病氣が無かつたなら露西亞は征服せられ、世界の局面は一轉したに相違ないと斷言して居るが、それは間違ひだ。よし戦闘開始及び、戦争中の命令がナポレオンから出たにせよ、八萬の生靈を失つた此の戦がたゞナポレオンの頭一つで行はれたとは考へられぬ。佛軍が露兵を屠る可くポロディノーに殺到したのは寧ろ本能だ。命令の結果ではない。全軍は長い行軍によつて、氣が苛立たしく荒々しくなつて居る所だつたので、モスコウ街道の敵を見ては、飲酒家が酒樽の栓の抜かれたのを見て、飲み度いと思ふ情の抑へられないと同様に、戦はずには居られなかつたのだ。此瞬間にナポレオンが戦闘禁止の命令を與へたとしても、却て敗を大きくするに過ぎなかつたらう。斯く戦がどうしても避くる事を得なかつたものとすればナポレオンの頭痛云々は無意味だ。歴史家の見解

の淺薄なる、概ね此類である。

ピエルはアンドレーエを訪問して、ゴルキーに歸ると從者に馬の準備を命じて置いて、ボリスが親切に用意して呉れた寢床に入つた。翌朝從者に起されて急いで出て見ると大砲の音が連りにする。城壘に上つて見渡すと、到る處兵馬に充ちて殺氣遠近を罩めてゐる。ポロディノーのわたり、霧隠れに見える白い寺院の邊から連りに打ち出す大砲が、盛に烟をあげて、大砲小銃の音は絶間もない。ピエルの傍に立つたクツゾフは將官に何か命令を與へた。ピエルはその將官について城壘を下り、今日の第一戦の戦はれた橋の處まで來た。兵士等はピエルを見て、「列の左側を通れ!」「左側、左側!」などと注意する。左側を進んで行くと思ひ掛けなく、舊知の副官と逢つた。副官は小山の上か

ら善く見えると誘うて呉れる。副官について行く。ビエルの馬はともすると遅れる。副官が恠んで見て呉れると右の前足に弾丸が當つて居る。副官はビエルの無事を祝した。間もなく副官とも別れて自由に戦する。兵士等は始めの中は其の軍人らしくない服装を見て不快の感を抱いて居たが、漸々その柔和な様子に親んで来て、砲兵隊では、彼を隊の中に加へて「紳士」と呼んだ。彼は観ては進み、進んでは観る中に、いつか戦線深くはひりこんだ。無数の弾丸は飛んで来る。漸く坂を走り降りて、「如何したら宜からう。」と考へた時、俄かに恐ろしい響がした。呀ッ^あと地に倒れる、と同時に大きな火花が目を掠める、再び落雷な様な音がしたかと思ふと氣が遠くなつた。やつと正氣に返つて、一生懸命に夢中で走り歸つて見ると隊長は戦死してゐる。兵卒も或は死し、或は傷き、傷手に悶える者、救助を呼ぶ者、目も當てられぬ光

景だ。ビエルは一人の敵兵と出會つて格闘したが遂にとりにがした。以前の砲兵隊の居た所へ来て見ると胸壁の端は血の池をなして居る。日は未だ高い、大砲の煙は濛々と四邊に漲り、銃の響の益々盛になつて來るのが、丁度死に行く人が、全力を集めて最後の叫をなす様だ。

四十五

アンドレーエの指揮する聯隊は豫備軍として二時迄セモノヴスコエの后方に止まつてゐたが、遂に前進を起した。時折砲弾や爆弾が頭の上を飛んで来て、瞬く間に五六人が一度に倒れる。一隊聲なく皆惘然として、牧場に沿ひ、匍匐して前進を續ける。砲弾の音がすると、皆思はず一所へ馳せ集まるので、副官をして密集せぬ様に嚴命せしめる。副官が命を傳へて歸つた時、爆弾がアンドレーエと副官の間に落ちて獨樂の様^{ごま}に廻つた。其刹那アンドレーエは「あッ、やられたな！」

と思ひ、「今死んぢやいかん！」と思つたが、卑怯！と自ら叱して、副官に「何！……」と云はうとする時、此度は烈しい火薬の匂と共に破硝子の様な破片が飛んで来て横腹を打つ。腕を上げて俯むけに倒れる。士官が驚いてとんで来る。右の横腹から迸る多量の血が草を染める。アンドレーは顔を草に埋めて苦しげに息をして居る。擔架が来て、森の中の野戦病院へ運ぶ。野戦病院では順番を待つ負傷兵が、喧しく叫び、唸り、泣いてゐる。血だらけの前掛をした軍醫はアンドレーを見るとき、すぐ助手をして天幕の中に入れさせた。アンドレーは少しは人心地がついた。

やがて助手は彼の服の釦をはづして、着物をぬがした。彼は不圖生涯の中で一番幸福な幼時の事を思ひ出した。着物を脱がして貰つて寢床へ連れて行つて貰ひ、乳母に子守歌を歌うて寝かしつけて貰つた時

の事を思出した。而して此世に生きて居るのが沁々嬉しいと思つた。

彼の側に、苦痛のあまり、「おゝゝ……お……お……お……お……」と唸つて、きれ／＼の泣聲で「見せて下さい！」と哀願して居る負傷兵が居る。醫者は頻りに宥めて居る。アンドレーはその唸り聲を聞いては、自分も泣きたい様な氣がした。負傷兵は血の澤山付いた靴を穿いた儘で切断された自分の脚を見せて貰つて女のやうに又「おゝゝ……」と泣き出した。軍醫も顔をそむけた。

「おや！此は一體どうしたのだ？此男が此處に居たのか？」とアンドレーは驚いた。此男はアナートルだ。軍醫はアナートルの頭を擡げコップの水を與へようとするが、彼はなほ烈しく泣いて居る。「あゝ此男と自分とは痛ましい、悲しい關係がある。」とアンドレーは思つて、純潔な楽しい幼時の事を想ひ出し、又、一八一〇年の舞踏會で始め

て逢つたナタシヤの事を思ひ出した。而して、苦痛に惱なやんでゐる此男と自分との關係を思つて、思はず同情の涙を催した。「同情とは——憎む可き人をも、即ち敵をも愛する心だ。これは神が此世に説き給ひ、マリヤが自分に教へたところのものだ。自分には今迄了解の出来なかつた愛だ。併し今になつて悟つても、もう遅い……。」

四十六

ビルノーから彼得堡へ歸つたエレンは困つた場合になつた、といふのは彼得堡では此國に於ける有数の顯官たる一貴族の特別の保護を受けて居り、ビルノーでは外國の或る若い公爵と親密であつたところ、今、彼得堡には二人共居るので、そのどちらをも怒らさぬやうにしなければならぬのだ。

始め若い公爵がエレンに不服を云つた時、彼女は、「それは男の我儘

といふものです。或る女が貴方の爲に犠牲になるとしたら、貴方はそれに對して何とかしなげりやならないのです。」と、對手が何か返事しようとするのを遮つて、「どうぞ結婚して下さい。さうすれば私は貴方の奴隷になります。」「左様な事が出来るものですか。」「貴方は理想がお高いからどうぞせ私とは結婚して下さいませう。」と泣いて公爵の慰めをも耳には入れず、「誰も此結婚の邪魔する者はありません、ナポレオンだつて其他の高貴な方だつて、いくらかも結婚し直した例は御座いますわ。」「併し法律や宗教が——。」と公爵は吃どもつて云ふ。「何故法律だの宗教だのつてそんな面倒なものがあるんでせう。」と云ふ。公爵は此大膽な言葉に驚いた。エレンは一方老貴族に嫉妬を起さして、彼女を若い公爵から奪ふ唯一の道は結婚にある事を悟らした。しかし、老貴族もビエルといふ夫の生存中に結婚しようとする其不敵

な考へに驚いた。

彼得堡では此事が非常な評判になつて居る。父ワシリは近頃非常に衰弱し、ひどく健忘になつて居て、エレンを見る毎に何遍も何遍も繰りかへす。「私は色々評判を聞くが……お前の心でよく考へてお決めよ。唯其丈だ。」

舞踏會で知合になつた友人が、老貴族と結婚する方が安樂であらうと云ふと、エレンはその好意を謝して、「私は二人とも、どちらにも苦しみを與へたくありません。」と答へたので、友人は此人は一時に三人の夫を持つつもりかと可笑しがつた。エレンの母は娘の有様を見て嫉妬を起して居る。夫の在世中に離婚して更に別の人と結婚する事が出来るかと或る僧侶に聞いて見ると、絶対に不可能だと云ふので、母は裏心に喜びながら、此事をエレンに話すと、彼女は唯笑つて居た。

八月の末には、友人エレンとしてビエルに手紙を出し離婚の手續を整へて呉れと頼んだ。

ポロディノの戦の終る頃ビエルは野戦病院を尋ねて、傷病者のみぢめな様を見、早く此怖ろしい生活から脱して、自分の家へ歸つて、安らかに眠りたいと思つた。今は砲彈の頭上を飛ぶものこそなければ、さまざま新戦場の光景は到る處眼を脅かす。モゼエースクに着いたのは夜更けてからだったので、宿屋が皆塞がつて居た。止むを得ず庭に出て、乗つて來た馬車の中で一夜を明かすことにした。疲れて居るのですぐ熟睡したが、耳にはなほ銃の音や叫び聲が聞え、血や火藥の匂もするやうに思はれて、恐怖の念は夢にまで襲ひかゝつて來る。驚いて目を開けるとあたりはひつそりとして、馬車の屋根の隙間からは

晴れた星空が見渡される。「あゝ有り難い事だ、何の願もない。」と呟いたが、又、すぐに眠に落ちた。今度はドロコフとの決闘の有様や、共済組合に入つた事などを夢に見た。長老が自分に説教して呉れるやうでもあつた。夢が覺めてもその説教の言葉はきれ／＼に心に残つて居た。「人に最も困難な事は自分の自由を棄て、迄も神の規則きぎてに従ふ事である……死を怖るゝが故に人は大悟する事が出来ぬのである……。」

此處を出發して、途中、舊知の將軍の負傷して居るのに出會ひ、自分の馬車に乗せてやつたが、義兄アナトールの死、親友アンドレーの負傷を此時將軍から聞いて今更のやうに驚いた。

九月十一日、ビエルはモスコウに到着すると直に總督に呼ばれた。控室で待つてゐると、副官はエレンが外國へ行くといふ噂を笑ひながら告げた。總督に面會すると、モスコウの危険に迫つて居る事を説いた。

て、「友人の忠告をお聞きなさい。出来る丈早く出發なさい……此丈云はうと思つてお呼び申したのです……。」と云つた。ビエルは不快の感を抱いて總督邸を去つた。

家へ歸るともう暗かつた。色々の人が面會に来て歸つた後であつた。エレンの手紙を読んだ。頭が錯亂して何の事か分わか明らない。寢床へも入らずそのまゝ寝て、翌る朝は遅く起きた。そして、客室には多くの來客を待たして置いたまゝ、用意が出来るとすぐ密ひそかに門からた。

四十七

ロストフ家は佛兵の侵入する前日迄モスコウに止まつてゐた。ビチヤも従軍した。伯爵夫人は二人の子供が二人迄戦争に出たので、非常に心配して居る。ニコライを呼び戻さうかと考へ又はビチヤを安全な

地へ轉隊する様に運動しようかとも考へたが、此の計畫は二つ共實行出來さうにもない。夫人は夜も碌々眠れず、假睡うたふをしてもすぐ子供の殺された夢などに驚かされる。伯爵も種々心配した結果、漸くピチャの轉隊丈は望が叶うたので、少しは心も慰なぐさんだ。

ピチャが歸つて來たのは九月九日であつた。十六歳の士官は喜び迎へる母の愛情をもさして嬉しいとは思はない、再びその翼の下から放すまいとする母の考へを知つてゐるので母に對しては努めて冷かに、唯、ナタシヤとのみ仲善くした。

最うナポレオン軍が近く押寄せたといふので、九日頃から十二日にかけてはモスコウは沸にへ返る様な騒ぎだ。ロストフ家も出發の用意に忙殺された。夫人は監督する丈で自ら手を下す事は無いし、ナタシヤやピチャは遊んでばかりゐて却て邪魔になる位だし、實際骨折つて働

いて居るのはソンニヤ丈だ。ソンニヤは此頃非常に悶え惱んで居た。それはニコライがマリヤに逢つたと云ふ事を知らせて來たので、伯爵夫人にソンニヤの前でも非常に喜んでその事を話す、その夫人の心持がよくわかつてゐるからだ。

戸は皆開け放たれ、室の中は荷物で一ぱいだ。ナタシヤは窓から外を見て居ると負傷兵の一隊が町に休んで居る。それが如何にも氣の毒なので、父に家の中へ入れても宜いかと聞くと、差支無いとの返事なので家に入れて休ませた。

其の晩、又車蓋くるまがさで蔽はれた馬車に乗つた負傷將校が立寄つた。醫者と二人の兵卒とを隨へて居た。取締女の計らひで階下の室へ通した。これはアンドレーエであつた。

伯爵家の長女の婿ベルグ(今は大佐に昇進して居る)は十三日にモ